time runner-MARIA

C＆R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｉｍｅ　ｒｕｎｎｅｒ－ＭＡＲＩＡ

【Ｎコード】
Ｎ０１２８Ａ

【作者名】
Ｃ＆Ｒ

【あらすじ】
時空管理者センターの巡視員マリアは、現代に甦った宮本武蔵、佐々木小次郎と共に、歴史を変えようとする時空犯罪者に立ち向かう

プロローグ（前書き）

プロローグは私らくだが書きます（＾Ｏ＾）／

プロローグ

――世界時空管理センター。それは、世界の歴史の監視を行うことを目的に、２１ＸＸ年から先進国各国に設置さている国際機関である。

今マリアはそのうちの、日本支局の局長室にいる。

「今日から、日本支局に派遣されましたマリア　デース、よろしくお願いしマース」

言って、敬礼する。

「まあまあ、そうかたくならないで。僕は局長の荒木だ、よろしくねマリア君」

彼女の正面にある大きなディスクに座っている黒いスーツ姿の局長、荒木は、笑顔で答えた。彼は年齢五十歳くらいの、丸っこい体格をした人の良さそうな男性だった。

「君、まだ二十歳だったっけ？　若いね～、それに美人だ。ああ、普通にしててていいよ」

荒木は小さな丸い眼鏡を掛け、ニコニコしながら言った。厭味のない口調だ。

「失礼しマース」

マリアは敬礼を解いた。

荒木は頷くと、ディスクの上の用紙を手に取り、それに目をやりながら口を開いた。

「マリア君は、もともとイギリス支局所属だったっけ。報告書では、本人の要望により――とあるが、どうしてまた日本に？」

「それは、ワタシが日本の歴史に興味があるからデース。特にサムライとかニンジャに憧れてマース」

「ガハハハハッ、面白いね、君」

荒木は豪快に笑った。マリアはなぜ笑われたのか分からず、首をひねる。
荒木は「うんうん」と楽しそうに頷き、「分かった。じゃあ、今日からさっそく働いてもらうんで、今から”巡視課”のほうに行ってくれたまえ」と告げた。
「ジュンシカ……って何デスか？」
マリアは分からず訊いた。
「う～ん……つまり”パトロール・セクション”のことだよ。そこの課長の牧野という男に、君のことは話してある。まずは彼に会って話を聞きなさい」
「”マキノ”……”ジュンシカ”……ＯＫデース、わっかりマーシタ」
マリアは言うと、再び敬礼して「それでは行ってきマース」と付け加え、局長室を後にした。

局長室を出て、すぐに問題が発生した。
「ジュンシカ……ジュンシカ……ってどこデスか～」
意気込んでやってきたものの、マリアは”巡視課”の漢字が読めない。すぐに迷子になってしまった。
「困ったデース……困ったデース」
廊下をとぼとぼ歩きながら、マリアは途方にくれていた。
と、突然、背後から男の声が彼女を呼び止める。
「何がそんなに困ったデスか～？」
「エッ！」
びっくりして振り返ると、そこにはヒョロリとした長身の若い男が、ニヤニヤと意地悪そうな笑みを浮かべて立っていた。年はマリアより十は上だろうか、顔はわりとハンサムなのに、無造作に伸ばした長い髪と口元の無精髭がどこか貧乏臭い。それに、せっかくのワイシャツがヨレヨレでだらしないし、ネクタイも曲がってくたびれている。

「アナタ、誰デスか？」
マリアは訊いて、肩まである自分のブロンドを整えた。
「俺？　俺はこれでも一応ここで働いているもんだ。あんた新人さん？」
「マリア　デース。イギリス支局から派遣されマーシタ」
「へ～……美人だね」
男は、先程局長が言っていたのと同じ言葉を口にした。
「アリガトございマース。それより、”ジュンシカ”ってどこにあるかおしえてほしいデース。そこのマキノというひとと会わなければなりまセーン」
言うと、男はニヤリとして、言ってきた。
「巡視課の牧野は俺だよ」
「ｗｈａｔ！？　ホント？」
マリアは目を見開いて声をあげた。牧野は頷く。
「全然想像とちがいマーシタ」
「ははははは、もっと偉そうな人間だと思ったかい？」
「イエース」
「正直だ」
牧野は頷くと、
「それじゃ、さっそくだが君の仕事場におけるエージェント（代行者）を捜しに行く。もう誰にするか決めているのか？」
と訊いてきた。
「ハイ、決めてマース」
マリアは笑顔で返事を返した。
すると、牧野はイタズラっぽい笑みで、
「分かりマーシタ。じゃあ俺についてきてくだサーイ」
と告げた。
「変なしゃべり方デース」
マリアは自分のマネをされているとも知らずに、プッと吹き出した。

プロローグ（後書き）

次はＣＩＰＨＥＲ君にスイッチします！
お楽しみに（＾。＾）ｙ－・。ｏ○

第一話　剣豪（前書き）

『第一話　剣豪』は、私ＣＩＰＨＥＲが書かせて頂きました！

第一話　剣豪

「ぬ……。」
頬を厭な汗が伝う……。
「どうした？足が動かぬか？」
クククッと厭らしい笑いが漏れる。
（見透かされている！）　武蔵は驚愕し一瞬眉が寄る。
「解り易い男じゃ。」
達磨が言う。
「どうじゃ？儂に提案がある。」

「な、何を言う…。」
武蔵の舌が喉とくっついて、上手く言葉を発する事が出来ない。
これは達磨の威圧による恐怖なのか、それとも達磨の怪しげな術なのか……。
ただ武蔵に解る事は、天下無双である筈の自分が……、剣豪宮本武蔵が、一度刀を構えたまま、擦り足一つ出来ないという事だけだった。それも、掛け軸の老人如きに！
「なぁに、簡単な提案じゃ。」
武蔵はゴクリと唾を呑んだ。
「足が動かぬのなら、刀を投げてはどうじゃ？」
達磨は目を細め、武蔵を諭す様に言った。
「何……。」
武蔵は絶句した。
剣豪である己が刀を投げるだと？そんな事が出来るものか！と、怒鳴り付ける事も出来ない。
「迷って居るのか？どうじゃ？言うてみい。剣豪宮本武蔵の心はどうじゃ？」
（俺の心だと……？）　両手に構えた刀がカタカタと揺れた。

武蔵は己の思いを必死に否定しようとする。
刀が震えるのは、長いこと構えを持していたからだと。
「それは、恐怖であろう？」
達磨が言い放った。
武蔵の思いをズバリと言い当てる。
その一言は、武蔵の衿持を粉々に砕いてしまった。
次の瞬間、刀は武蔵の手を離れ、達磨めがけて飛んでいた。
武蔵は侍の命である〈刀〉を投げたのだ。
天下無双の剣豪、宮本武蔵の最後の闘いであり、最期の時であった……。
「こ……こは？何処……だ……？」
男は野をおぼつかぬ足取りで歩いていた。
頭が痛い。
割れそうだ。
一体、此処は何処なのか……。
それ以前に、自分が誰なのかすら曖昧だ。
男は当て所無く彷徨っていたが、妙に腰がカチャカチャと五月蠅い。
不思議に思い目をやると、そこには二本の太刀がぶら下がっていた。
「あぁ、俺は……、宮本……武蔵……だったな。」
俺は、何故こんな処を彷徨っているのか？　少しづつ、武蔵の思考が回り始めた。そうだ、俺は既に……。
「……！！」
そうだ、俺は既に死んでいるのだ！　何故死んでいる筈の自分がこんな処に居るのだ！？
「どうやら、貴方も同じ疑問に当たったらしい。」
突然、真後ろから声がした。
同時に殺気を感じた武蔵は、反射的に身を屈める。
すると、さっきまで頭の在った位置にピュンと音を立てて白刃が閃

めいた。
武蔵は白刃を躱すと、体を捻りながら前転し、膝立ちの姿勢で相手と向き合う。既に相手は刀を上段に構えていた。
「お前は！？」
刀が武蔵を襲う。
武蔵は即座に、腰に挿した二本の太刀を抜き、十字に組んで受け止めた。
刀一本では受け切らなかっただろう。〈物干し竿〉と称される大太刀であった。
「お前は小次郎！！」
天才剣士、佐々木小次郎。確かに、武蔵が厳流島で斬った筈の男である。
「お前が何故生きている！」
言いながら武蔵は小次郎の物干し竿を撥ね除けた。そして、立ち上がり構える。
「さあ……？何故でしょうね？」
二人は構えを崩さずに対峙する。
次の一撃を警戒しながら、ジリジリと間合いを詰める。
「今度の死合いは冷静です。姑息な手は通用しませんよ。」
小次郎が言う。
確かに武蔵は、小次郎を斬っている。
しかしそれは、武蔵の作戦勝ちとでも言う死合いだ。
小次郎を苛立たせ、大振りになった処を斬った。
辛くも得た死合いであった。
一度、剣を捨てた己が勝てるだろうか？楽に勝てる相手ではない。
いや、間違いなく最強の敵だろう。
そう思うと、何故だか萎え掛けていた気力が湧いてくる。
この、佐々木小次郎と言う男は、好敵手だと実感できた。
「良い目です。」
小次郎は唇の端を片方だけ上げて笑うと、張りつめた緊張を払う

ように、無造作に一歩足を下げる。
同時に刀を鞘に納めた。
あとほんの少しで本気の斬り合いになる、という刹那であった。
武蔵も二本の刀を鞘に納める。
「何故我等は生きて動いて居るのだ？」
「さあ？それは解りませんよ。」
侍独特の挨拶を終えた二人は、砕けた様子で会話をする。
但し、お互いの間合いには入ろうとしない。
「時に武蔵、途中からもう一つ、気配が増えていますね？」
「あぁ。」
言って、武蔵は右、小次郎は左を向く。
これで二人は同時に同じ方向を向いた事になる。
そこには、黒のスーツに革靴を履いた男が立っていた。
「あ、お気付きになられましたか？」
やけに明るく、にこやかな男だ。それに
「変わった格好だな。」
「まったくです。」
二人の剣士は怪訝そうに男を見つめた。
スーツなど見た事も無い、江戸時代初期の剣客である。当然と言えば当然の反応だろう。
「変わった格好……ですか？」
男は自分の見形を確認する。
「で？お前は何者なのだ？」
男に、殺気どころか闘う意志すら無いのを確信した武蔵は、無造作に歩み寄りながら話し掛けた。
「はい。私、こう言う者でございます。」
懐から革製の名刺入れを取り出し、武蔵に名刺を差し出す。

「何だ、この紙切れは？」
そう言いつつも名刺に印刷された文字を読む。

『世界時空管理センター　日本支局　スカウトマン
浅井　裕樹　』

「意味が解らん。」
武蔵の率直な感想であった。
「時空管理……？」
いつの間にか小次郎も、武蔵の横から覗き込む様に名刺を読んでいる。
「あ、小次郎様にも……、どうぞ。」
スカウトマン浅井は名刺をもう一枚取り出し、小次郎に渡す。
「何故名を？」
名刺を受け取りながら小次郎は、益々浅井を怪訝そうに見る。
「はい。実は御二方を生き返らせましたのは、我々《世界時空管理センター》でして。」「生き返らせた……。道理で小次郎が生きている訳だ。」
「貴方もね。」
武蔵と小次郎は互いに目を合わせる。
「しかし……、人を蘇生させる事など、容易には信じられませんね。」
小次郎は浅井に目を移しながら言う。
「はい。至極ご尤もなご意見です。まあ、色々と面倒な手順を踏まなければならないのですが、簡単に説明しますと、甦る仕組みとしては……、『彷徨う精神に呼び掛けて、人工的に作った肉体に注入

する。』と言ったところです。」　マニュアルの様な言い方で浅井は言った。
「作られた肉体……ですか。」
「人工的と申しましても、我々の技術力を持ちまして、生前の肉体と何等変わりのないモノになっております。既に御二方の肉体は完成しておりますので、いつでも蘇る事が出来ます。」
浅井は畳み掛ける様に言う。
「し、暫し待て。今、我等が『いつでも蘇る事が出来ます』と申したな？我等は今、蘇って居るのではないのか？」
武蔵が訪ねる。確かに今、武蔵と小次郎は生きて動いているのだ。

「いえいえ、完全に蘇っている訳ではございません。
御二方が御望みであれば、蘇らせる事が出来ます。
逆に、御望みでないなら、このままで居て頂きます。
現在、御二方は精神体でございますので、放って置けば、いずれ霧散して消えてしまいます。」
浅井が答えた。
「我々に選択岐は無い、と？」
小次郎は浅井をにらみつけた。
「いえ、飽くまで御二方の意志でございます。どうされますか？」

「その様な事、決まって居ろう。二度も死ぬ気は無い。」
武蔵は即答した。が、小次郎は黙ったままである。
「小次郎様はどうされますか？」

「何か、交換条件でも在るのだろう。それが何か解る迄は、軽率に答えられる物では無い。」
小次郎は浅井をにらみながら言った。
「はい。蘇らせるに当たり、交換条件の様な物はあります。御二方には、やって頂きたい事があるのです。」「それは？」

「ここでは説明もしずらい。蘇らせる事も出来ないですしね。《時空管理センター》に一度御出頂き、そこで条件の説明を受け、納得した形で蘇って頂きたい。」
浅井は言いながら、懐からペン状の機械を取り出す。
「来て頂けますね？」
浅井が強い口調で、小次郎に言う。
「まあ、武蔵殿と同じく、二度も死にたくはないですから。」
「それは良かった。」
浅井は、溜息を付きながら後ろを向き、先ほど取り出た機械を自分の前方にかざし、スイッチを入れる。
すると、機械をかざした位置の空間が裂け、大きな丸い空洞になった。
「さあこちらです。付いてきて下さい。」
浅井は、ちらちらと後ろを気にしながら空洞に入っていく。
「仕方無い。我々も行きますか。」
小次郎が武蔵に言う。
「そうだな。」
二人も、浅井の後に続いて空洞に入っていった。

第二話　交渉成立（前書き）

らくだです！個人的に牧野さんを一杯つかいたい・・・

第二話　交渉成立

空洞を抜けると、すぐに別の空間に出た。そこは真っ白な、いわば光の中のような場所だった。

空間の中には、二つの長いソファとテーブルが一つぽつんと置かれており、その他には一切何も見当たらない。

「不思議な部屋だ」

小次郎がつぶやき、辺りを見回していると、自分達がやってきた空洞がゆっくりと小さくなり、そして消滅してゆくのが見えた。

「罠……とかでは無いですよね、まさか」

用心深い小次郎は心配げな表情で質した。

「私が罠を仕掛けても意味が無いでしょう」

浅井は無表情で返した。

「なんでもいい、条件とやらを早く聞かせてくれ」

豪快な性格の武蔵は、勝手にソファに腰を下ろし、浅井を促した。

「良いでしょう。しかし、ここからは私の仕事ではありません。私の仕事は、あくまであなた達の魂をここに誘導することです。ここからは、面接係りの人間があなた達を見極めます」

浅井は言った。

「面接係り？　つまり我々を検査する人間のことですね」

小次郎は腕を組んで言った。

「そう言うことです。それでは、係りの人間を呼んでまいりますので、少々お待ちを」

浅井は言って礼をすると、一歩後ろに下がった。すると不思議なことに、彼の体は光の中に消えてしまった。残されたのは武蔵と小次郎二人だけ。

「むう……未だに考えが整理できん。ここは時空管理……何だって？」

武蔵は名詞を見つめて首をひねった。カタカナが読めない。

「センターです」
小次郎は立ったまま言った。
「そうそう、時空管理……」
「センター」
「そう、せんたー。あの浅井という男、一体何者なのか。我々を甦らせるとか言っていたが……まさか神か？」
武蔵は真剣にそう思った。
小次郎はかぶりを振り、それを否定した。
「神にしては、やることがいちいちややこし過ぎます。彼も、我々と同じ人間でしょう。おそらくは、我々が生きていた世界とはまったく違う世界の人間……」
「ご名答」
小次郎の言葉を、男の声が遮った。二人はビックリして背後を振り返る。
そこには、いつの間にか浅井とは違う別の男が立って居た。
「あなたは？」
小次郎が訊く。
「俺？　俺はあんたらの面接をする牧野ってもんだ、ヨロシク」
牧野と名乗る男は、汚い頭をガリガリ掻きながら、ニカッと笑いかけた。武蔵と小次郎は彼の突然の出現に驚いたものの、本能的に、彼が友好的であると感じ、すぐに警戒を解いた。
「さ、あんたも座りな」
牧野は言って、小次郎にソファをすすめた。
「忝い、失礼仕る」
小次郎は律儀に断ってから武蔵の隣に腰を沈めた。牧野は「お堅いヤツだな」と笑いながら彼らの向かいに腰を下ろした。
「さてと……ん、どうした？」
牧野は、なにやらもぞもぞと落ち着かない様子の小次郎を見て訊いた。
「いえ、私は生まれてこのかた、このような椅子には座ったことが

ないもので……その……どうも落ち着かなくて」
小次郎は腰をモジモジさせながら言った。
「ええい、じっとせい！　気色の悪い」
隣で武蔵が堪らず咎める。
「あなたはよく平気ですね」
小次郎は武蔵を見て半ば呆れ顔で皮肉った。
「ははは、コイツはソファっていうんだ。慣れれば結構心地のよいものさ」
牧野は笑顔で説明した。小次郎は「……はあ」とだけ答えた。
牧野は頷き、「さて」と話を切り替えた。
「ぼちぼち面接を始めるかね。まあ、面接と言っても、ほとんどは君達の仕事についての説明に終わるんだがね」
「仕事？」
武蔵は眉をひそめた。
「おや、聞いてなかったのか？　君達には、俺達世界時空管理センターの巡視員のエージェント……つまり代行人になってもらい、世界の歴史の秩序を守ってもらうんだよ」
「なんと、歴史の秩序？」
小次郎は首を傾げた。間髪を置かずに武蔵が突っ込む。
「ちょっと待て！　そもそもお前達は何者なんだ？　別の世界の人間と小次郎が言っていたが」
武蔵の言葉に牧野は頷き、説明した。
「ここは、君達が生きていた時代から三百年ほど後の世界なんだよ」
「未来……という訳ですか」
小次郎が口を挟む。
「ほう……意外と物分りがいいな、小次郎君」
「ここまでで十分不思議な体験をしてきたのです。もう何を言われても驚きませんよ、私は」
牧野の言葉に、小次郎は開き直ったような口調で返した。武蔵は、いまいち分からないような顔をしているが。

牧野は「なら話は早い」と続けた。
「我々の時代には、過去のどの時代にでも行ける機械……君らの言葉で言うカラクリがある。我々は『タイム・ゲート』とこれを呼んでいるがね。コイツは使い道を間違わなければ、過去の真実を知ることができる便利な物なんだが、ふと血迷った連中がこれを使って過去の世界に迷い込むと、大変なことになっちまう。下手をすれば、人類の歴史を大きく変える結果になりかねんのだ。
そこで、この時空管理センターが、常時、歴史に異変が無いか管理している訳だ。そして、万一異常が見つかれば、君達のように選ばれたエージェントを、歴史の修正を目的にその時代に派遣する、という訳さ。何か質問は？」
牧野はまくし立てるように語った。
「一つ気になることがある」
と武蔵。
「なぜ我々のような人間に、わざわざ代行を求める必要があるのか。牧野殿が未来の人間であれば、それこそ未来の武器と知恵を持ってすれば、たやすく問題は解決されるのではないのか？」
武蔵の問いに対して、牧野は満足そうに頷いて答える。
「武蔵君も鋭いね。確かに、我々が現場に行って修復を行えば、収拾は早いかもしれん。が、しかし、もし誤って我々が過去に自分達の痕跡を残してしまえば、そこからまた歴史が変わってしまうかもしれん。が、仮に剣しか持たない君達ならば、たとえ何千年遡っても、その歴史に与える影響はほとんど無いだろう」
「まるで、私達が何千年も前から成長していないような言い方ですね」
小次郎が少しむっとした顔で言った。
牧野は小次郎を見て不敵に笑った――と思うと、目にも止まらぬ手の動きで懐から何かを抜いた。そして、小次郎がそれが何か分からぬうちに、ガウゥゥウン！　という爆音が轟き、小次郎の胸に衝撃が走った。

「うおぉ！！」
小次郎は衝撃でソファの後ろに吹っ飛んだ。
「何をする！」
武蔵が剣の柄を握り、叫ぶ。牧野は手に筒のような物を握っていた。その先端から煙が上がっている。種子島に似ているが、それよりずっと小さく、しかも火縄が見えない。
「貴様、小次郎に何をした！」
武蔵は怒り狂って、二本の刀を引き抜いた。
「落ち着け、後ろを見てみろ」
牧野は彼を制して、その背後を指差した。そこには小次郎が不思議な顔をして立って居たが、胸の辺りにぽっかりと穴が開いていて、向こう側の景色が見えている。
牧野はまた笑顔に戻って、告げた。
「今は魂だけの体だから死にはしないが、生身だったら間違いなくお前さん死んでたぜ。どうだい、はたしてこんな物を、何千年も前に使えるかね」

もはや、武蔵と小次郎には返す言葉すら無かった。

第二話　交渉成立（後書き）

交渉成立？　四話に続きます。

第三話　魂から体へ（前書き）

どうも、ＣＩＰＨＥＲです！らくださんの代わりに『牧野さん』をたくさん使っちゃいました！

第三話　魂から体へ

「まあ、そんなに固くなりなさんなって。」
絶句している二人に、牧野が言う。
手に持っている物騒な物とは対象的に、やけに楽しそうな余裕の笑みだ。
「と、申されますが……」
胸にポッカリと大穴を空けた小次郎が、眉をしかめながら答える。
「確かに、こいつは使っちゃいけねぇ。」
小次郎の胸に空いた穴を見ながら、武蔵は言う。
「そうだろう。こんなもんを不用意にぶっ放しちゃいけないよ、実際。」
牧野は、先程とは打って変わって真剣な表情だ。
「貴方って……。」
「お前って……。」
小次郎と武蔵は同時に呟く。　『変わり者』
「はっはっはっ、良く言われる。」

「だろうな。」
武蔵は率直に言う。
「……」
牧野は無言で、武蔵に筒の先端を向ける。
「お、おい！一寸待て！」
幾ら死なないと頭で理解していても、小次郎の胸を見ると、流石の武蔵も怯んだ。
「冗談だ。」
牧野はニカッと歯を見せて笑い、懐に筒を仕舞った。武蔵はほっと胸を撫で下ろす。

「楽しそうデースネ！」
突然背後から、明るい女の声がした。もちろんマリアだ。
「よお、やっと来たな。」
牧野は片手を少し上げ、マリアに話しかける。
「お前さんが居ないと、話が進まねえ。」

「良く言う。話を進めなかったのは、お前じゃねえか。」
武蔵が牧野に食ってかかった。
「武蔵、懲りないですね。」
と、小次郎は半ば呆れ顔で武蔵を一瞥すると、マリアに向き直り、
「所で、貴女は？」
と訊いた。
「……」
しかしマリアは、小次郎の顔を見つめたまま動かない。
「どうしました……？」
「コジロー？」
マリアはうめく様に呟いた。
「そうですが、何か？」
「アハハッ！コジロー、コジロー！」
小次郎の名を叫びながら、小次郎の体をペタペタと触りまくる。
「また妙なのが……。」
小次郎は頭を抱えた。　武蔵はと言えば、牧野に良い様に遊ばれている。
「ＷＨＡＴ？コレは？」
マリアはようやく、小次郎の胸に空いた大穴に気付いた。
「あぁ、そいつはな」
牧野は武蔵を放って置いて、マリアに説明する。
「コイツ等に未来の素晴らしさを教えてやったんだ。」

「スバラシさデスか。」

マリアは、小次郎の胸の穴をマジマジと見る。
「そろそろ、話を聴かせて頂けませんか？」
牧野に対し、真剣な顔で小次郎は言った。
「そうだな。手っとり早く行こうか。」
牧野はにやけた顔を引き締めた。
「マリア、こっちに座ってくれないか。」
牧野はマリアを手招きして、自分の近くに座らせた。
マリアが今度は、武蔵に興味を示していたからだ。
「ハイ、解りマシタ。」
マリアは仕方無さそうに、牧野の隣に座った。
小次郎もそれに習う様に、武蔵の隣に座る。
マリアはニコニコ笑いながら、自分の向かいに座る武蔵と小次郎を見比べ、時折
「うんうん」
と頷いている。
「二人にエージェントになって貰うに当たって、一人巡視員が付く事になっている。その巡視員から、その時々の指示を受けるわけだ。」
牧野が仕事の詳細を説明する。
「それで、だな。その巡視員って言うのがこのマリアなんだ。」
牧野はちらりと、マリアに目をやる。
「マリアと言いマース！よろしくお願いしマスッ！」
明るく笑いながらマリアが二人に挨拶をする。
「なぁ、その、まりあ……だっけか。お前さん何者だい？」
武蔵は眉をしかめながら、ストレートにマリアに訊いた。
「“ナニモノ”？」
小次郎が少し考えて
「髪の色と瞳の色が我々とは異なる様ですが、一体どう言う事なのかと。」
と説明する。

「ハイ。ワタシは“Ｔｈｅ Ｕｎｉｔｅｄ Ｋｉｎｇｄｏｍ ｏｆ Ｇｒｅａｔ Ｂｒｉｔａｉｎ ａｎｄ Ｎｏｒｔｈｅｒｎ Ｉｒｅｌａｎｄ”から来マシタ！」

捲し立てる様にマリアが言った。

「ざゆな……、何だって？」

武蔵は堪らず小次郎に訊いた。

「さっぱり解りません。」

小次郎も首を振る。

「だぁ！混乱するだろ、マリア！」

牧野は一度マリアを叱って、武蔵と小次郎に向き直り

「イギリスだ、“英吉利”。要は日本以外の国だ。そこの人間は髪の色や瞳の色、肌の色がマリアの様な奴ばかりなんだ。」

と、二人に説明した。

「日本は小さな国の一つでな、外国には他にも色々な、髪の色や瞳の色、肌の色があるのだよ。」

牧野は考えながら説明の補足をする。

「他に質問はあるか？」

「何故我々がエージェントに？」

小次郎が訊いた。

「ハーイ！ワタシ　ムサシ、コジロー大好きデース！会えてとっても嬉しいデース！」

「と、言う訳だ。エージェントになるに当たって、このマリアの下

で働いて貰う。生き返る前にマリアとの顔合わせをしたんだ。」
牧野は二人を見回し
「他に何か質問は？」
と続けた。
「……。」
二人は黙ったままだ。
「無い様だな。それでは、二人に本物の肉体を与える。」
牧野は立ち上がり
「付いて来い。」
そう言って光りの中に消えていった。
「付いて来い、とは言うが……」
武蔵と小次郎は、一応ソファから立ち上がりはしたが、突然目の前から消えた人間に、どう付いて行こうか迷った。
「ハーイ！こっちデス。」
マリアが武蔵の右手と小次郎の左手を掴んで、グイグイと引っ張る。
「意外と力が強いな。」
と、武蔵が、誰にも聞こえない位の声で呟いた。
しかし、武蔵も小次郎も、逆らおうとはせずに、マリアに引っ張られるまま後に付いて行く。
真っ白な空間を少し歩くと、突然視界が変わった。

ただ、長い廊下が続いている。
少し前で、牧野が三人を待っていた。
　マリアと武蔵小次郎の三人を確認すると、ニヤリと笑い、
「もう打ち解けているじゃないか。」
と呟いて前を向き歩き出した。
「待ってくだサーイ！」
　マリア達が後に付く。
そのまま四人は暫く歩いた。
　武蔵も小次郎も、何もない廊下を物珍しげに見物している。
「木では無いな。」
「はい。こんなに大きな一枚岩を削り出したのでしょうか？」
　などと言った会話までしていた。
「おい、こっちだ。」
　牧野が何もない壁に入っていく。
「もう、何が起ころうと驚きませんよ。」
　小次郎が言ったが、お構い無しに、マリアがグイグイと手を引っ張って、三人も壁に入っていった。
「こいつぁ……。」
　入るなり武蔵が驚きの声を上げた。
壁の中は広い部屋になっていたが、武蔵が驚いたのは、このことではない。
部屋の中には、人間より一回り大きいガラスケース四つ置いてある。
その中に、自分が居るではないか！
「此が、我々の本物の肉体。」
　小次郎は、穴の空いた己の胸に手をやりながら言った。
「しかし、何故四つも。」
　小次郎が疑問を口にする。
　四つのガラスケースは、真ん中に大きな機械を挟んで、左右に二つずつ。
右の二つには、それぞれ武蔵と小次郎の肉体が入ってる。

「簡単なことさ。」
牧野は真ん中の機械に近づき
「空いた方のケース……、つまり箱にだな。」
機械をいじりだした。すると中身の無いケースがウィーンと音を立てながら空く。
「入れば、それで良い。」
牧野は武蔵と小次郎を見る。
「ササ、入って下サーイ！」
武蔵と小次郎は、いつの間にか後ろに回っていたマリアに押され、中に入った。
「真に大丈夫であろうな！？」
武蔵が不安になって訊いた。
「大丈夫だよ……」
牧野がまたもや機械をいじりだす。
「多分な。」
言いながら何かのスイッチを入れた。
この機械はもちろん安全である。
機械はヴィィン……と音を立てて動き出す。
途端に武蔵と小次郎は、気が遠くなった……。
「これで、彼等が目覚めた時には、生身の剣豪と対面ってわけだ。」
牧野が言う。
「ハイ！楽しみデース！」
マリアが、本当に嬉しそうに笑っている。

第三話　魂から体へ（後書き）

遊びすぎたかな？真面目な話は『らくださん』任せました！

第四話　帝と英（前書き）

まいど、らくだです（＾ω＾）　長いけど頑張って読んでくれぃ！

第四話　帝と英

西暦１９３年、中国は徐州。ここのとある宿舎で、深夜に二人の男が静かに酒を飲み交わしていた。

「劉殿、もはやこの呂布が味方したからには、　袁術の軍など恐るるに足りません」

呂布は笑いながら劉の杯に酒を注いだ。まだ顔にあどけなさが残る二十歳を少し過ぎたばかりの小柄な青年である。

「確かに。呂布殿がいれば百人力だ……いや、一騎当千というからには千人力か」

酒をあおる劉も、かなり上機嫌である。姓は劉、名は備。この時劉備は三十二歳であった。

「ははは、何をおっしゃいます！　そなたの”雌雄一対の剣”の前には私などとてもとても」

と、呂布。しかし、彼は顔では笑っているものの、目は何処か冷たかった。今は心中を隠すために笑顔を装っているが、この男、後の徐州の合戦に置いて、劉備を裏切ることになっている。

「いや愉快愉快！　今夜は朝まで飲み明かそうぞ」

劉はそうとも知らず、この裏切り者の注ぐ酒に酔いしれていた。

と――

「そいつァまっこと下せん話しぜよ」

外の廊下から、男の声が響いた。

「誰だ！」

劉と呂布は同時に叫んだ。相手の顔は、簾で隠れて窺えない。

「ふん、ワシが誰かっちゅうことなど、この場では知らんでもええことじゃ」

男は言って、簾をくぐって部屋に入ってきた。背丈は劉と同じ百七十五センチほど、年も同じくらいか。体格は筋肉質でがっしりしている。見慣れぬ異国の服装をしていて、長い髪は後頭部でしっかりと束ねられている。そして気になるのは、彼が腰に下げている奇妙な形をした剣、刀身が緩やかな曲線を描いている。一見細くて脆そうだが、その切れ味やいかに。

「貴様、袁術の手の者か！」

劉が叫び、手元の自分の身長ほどもあろうかという大剣を引き寄せた。

「おいおい、ワシは貴殿と争うつもりはない、ワシは刀が嫌いじゃぁ。それより、貴殿に話しておきたいことがある」

男は言って、劉と呂布の前にどっかりと腰を据えた。

「なんじゃ、話とは」

劉は男の度胸をあっぱれと取ったか、男の無礼を無視して訊いた。

男は「うん」と頷いて切り出した。

「始めに訊いておくが、貴殿が劉備殿で、こちが呂布殿で相違ないか」

「いかにも」

劉は頷いた。

男は続ける。

「では劉殿に申す。この右の呂布という男は、後の徐州の合戦で、貴殿を裏切るつもりじゃぁ。今のうちにこんな裏切り者など、追放するべきじゃ」

「今なんと！？」

驚いたのは呂布だった。

「おまんさんが、劉殿を裏切るつもりだと言っちゅう」

男はあっさりと答えた。

「呂布殿、真か！？」

劉はぎょっとして呂布を見た。

「劉殿、こんな下賤者の言うことを信じまするか！」

呂布は明らかに動揺していた。逆に、今しがた会ったばかりのこの男の態度の方が、藪から棒の話しのわりに、説得力を感じる。
「劉備殿、貴殿は後の帝となられるお人じゃ。このワシと、そこの若造、どちらが真を申しちょるか、貴殿なら分かるはず」
「黙れ、貴様やはり袁術の手先であったか！」
呂布は狂ったように喚いた。
「何、そなた、この劉備が皇帝になると申すか！？」
劉は呂布にかまわず、男の言葉に驚いていた。
「うぬぅ……劉殿、ご乱心とお見受けした……ならば、この下賤者共々、生かしておくわけにはゆきませぬ！」
呂布は立ち上がり、壁に立てかけておいた自分の槍を手にした。
「呂布殿、何をする！」
「ふん、やっと本性を表しやがったか、馬鹿野郎が」
男は言って劉を制し、自分も立ち上がって呂布と向き合った。そして徐に刀を抜き、中段の構えをとった。
「奇妙な剣だ……どうした、剣が震えておるぞ、さては臆したな」
呂布は嘲笑った。男の刀の切っ先が、ゆらゆら動いている。
「これぞ、北辰一刀流！」
男は言うと、鋭い目つきになった。劉は彼を見ながら、自分の腕に鳥肌が立つのを覚えた。
「ほざけ！」
呂布は嘆を発すると、重そうな槍をいとも簡単にぐるぐると回した。そして一度槍を後ろに引いてから、渾身の突きを男に放った。

――びゅん！

呂布の槍は風を切って男の心臓に伸びて行く。そして一瞬で彼の胸元を抉ろうとした、その刹那、男は気合と共に動いた。
「どっせぇぇ！」
男は怒号を発すると、刀を真上に振り上げた。

ガシィン――と音を立てて、呂布の槍が跳ね上がる。男は、呂布の槍を刀の峰で払いのけたのだ。その膂力は凄まじいものがあった。
「クソッ！」
呂布はうめいた。自らの槍が、天井に刺さって抜けない。
「きえぇ！」
男は間髪を居れず、無防備な呂布に踏み込み、刀を横に薙ぎ払った。
「――――！」
呂布は何かを叫ぼうとしたが、それも間に合わず、男の刀が彼の首を飛ばした。頭がなくなった呂布の首からは鮮血が迸り、脚ががくりと折れた。その足元には、呂布の顔が、男を恨めしそうに睨んでいた。
「まっこと、おまんは馬鹿野郎ぜよ……」
男は、返り血を浴びた真っ赤な顔で冷ややかに告げると、パチンと刀を鞘に収めた。
劉は、口をあんぐりをあけて男を眺めていた。呂布は中国でも名高い槍の名手だ、”雌雄一対の剣”を使う劉とて、彼に一騎討ちを挑まれたら勝てる保証はない。しかし、この男はいとも簡単に呂布の首をとったのだ。とんでもない剣客だ。
男は劉に振り返り、口を開いた。
「歴史的には、この呂布が貴殿を切りつけるはずじゃった……しかし、呂布は今このワシが切り捨てた」
「……歴史、とは何のことじゃ……そなたは予言者か、それとも鬼神の類か」
劉は男と正面から対峙し、問いかけた。
「劉殿、歴史なんてもんは、下らんもんだとは思わんか？」
「……説明してくれんか？」
劉はまた床に腰を下ろし、胡坐をかいた。彼はもはや腹をくくった潔い顔で男を見ていた。その目に迷いはない。
「さすがは噂に聞くだけの太い人間ぜよ」

男は血まみれの衣装も気にせず、劉の前に座った。
そしてこう切り出す。
「劉殿、貴殿に見てほしいものがあるがじゃ」

＊

それから時を遡ること二千年、ギリシャのベロボネス半島にあるネメアの地。ここでは近くの谷に迷い込んだ一匹のライオンが、たびたび近隣の村にやってきては人畜に被害を与えていた。

ネメアの農家で育った青年ヘラクレスは、村一番の怪力の持ち主であり、また誰よりも正義に篤い男でもあった。彼は困り果てた村の人間に、自分がライオンを退治してくる、と請け負って、弓と棍棒を携えて谷にやってきた。
「ライオンめ、いるなら出て来い！　俺が相手をしてやる！」
ヘラクレスの声が谷に響き渡る。
と、背後の茂みの中から何かが近づいて来る気配があった。

グルルルルゥ……！

低い唸り声を発しながら、茂みから現れたのはやはりライオンであった。ライオンは涎をたらして、目をぎらつかせている。
「このヘラクレスを食おうというのか」
言って、彼は矢を一本弓に番えた。そしてそれを固く引き絞り、ライオンの頭に狙いを定める。
「死ね！」
ヘラクレスは言葉と共に弓を放った。弓はまっすぐにライオンの頭に向かって跳んでいったが、本能的に反射したライオンがわずかに首をひねったせいで弓は目標をたがえ、その右目に刺さったのみ

で命を絶つまでには至らなかった。

――ゴォオオオオン！

ライオンは怒りで我を失い、右目に矢が刺さったままヘラクレス目掛けて突進してきた。もはや新たに矢を番える暇もない。ヘラクレスは棍棒を構えた。

「くらえ！」

ヘラクレスは棍棒を怒号と共に打ち下ろし、見事にライオンの頭を強打したが、強度はライオンの頭の方が勝っていたため、棍棒は真っ二つに折られた。やむなくヘラクレスはライオンと組み合うことになった。

跳びかかるライオンを真正面から受け止める。ヘラクレスの赤い髪とライオンの鬣が絡み合う。

ライオンは、身長二メートル近くあるヘラクレスよりさらに大きかった。膂力ではさすがのヘラクレスも勝てず、たちまち地面に押し倒されてしまった。

ヘラクレスはライオンの腹を蹴り飛ばし、どうにか窮地を脱した。しかしライオンはすぐに起き上がって跳びかかる体勢をとった。

……もはやこれまでか。

諦めたその時だった。谷の上から何か光る物が飛んできたと思ったら、それがライオンの腹に深々と突き刺さり、ライオンは転倒した。見ると、跳んできた物はとてつもなく大きな剣だった。

誰がやったのか戸惑っていると、谷の上から男の声が響く。

「今だ、殺せ！」

「おう！」

ヘラクレスは反射的に飛び出していた。ライオンの首に組み付き、怪力に任せて一気にそれをへし折る。ライオンは泡を吹いて絶命した。

「誰か、俺に手を貸してくれたのは！？」

ヘラクレスは立ち上がり、辺りに叫ぶ。すると、谷の上に人間と思しき二つの影があった。
「そなたがヘラクレスか」
片方が声をあげる。
「いかにも、俺がヘラクレスだが、何か用か！」
ヘラクレスが問い質すと、もう一人がこう言った。
「ヘラクレスよ、ワシらと共に、正義を探す旅に出ないかい」
ヘラクレスに、それを断る道理はなかった。

第四話　帝と英（後書き）

謎の「男」の正体は分かったかな？　では次に行くデース！

第五話　異変（前書き）

どうもＣＩＰＨＥＲでっす（＾ｏ＾）／楽しく書かせて頂きました！

第五話　異変

世界時空管理センター各地で、問題が発生した。ー中国支局ー
「大変です！」
監視員が叫んだ。
「どうした。」
歴史監視部の長が返す。
「時空に大きな歪みが生じました！」
監視員は忙しそうにキーを打ち込みながら答えた。
「歪みだと？何が起きた！」
「現在、出来る限りの調査をしております。」
中国支局監視部の監視員十五名が、一斉にキーを打ち出した。
「大きな歪み……。歴史を変えてしまうほどの歪みか？」
部長が眉をしかめて呟く。
「これは！？」
監視員が思わず、と言った感じで叫んだ。
「調査が完了しました。」
別の監視員が真剣な顔で言う。
「Ａ．Ｄ．１９３年。『劉備』ロストしました。」
「ロスト……だと？原因は！」
部長が訊いた。
「それが……、良く解らないのです。」
「解らんとはどう言う事だ。」
部長の問いに、監視員が首を振る。　それも解らないと言う事だろう。
「ただ、」
また別の監視員が口を開いた。
「ただ、解ることは、何者かが巧みに隠蔽しているのではないかと。」

「隠蔽だと？何が起こっているのだ！！」
―ヨーロッパ支局―
「オイオイ。冗談じゃない。」
監視員が呟いた。
「どうしたんだ？」
別の監視員が訊く。
「面倒だなぁ。ギリシアの英雄様が消えちまった。」
世間話でもする様に、重大な事を口にする。
「何だって！？」
「ウルサイぞ！」
部長が怒鳴った。
「いえね部長。」
監視員が
「大変な事が起こりましたよ。」
脳天気に答え、キーを叩き始めた。
「お前の“大変”は当てにならないからな。」
部長は疑いの目を向ける。
「ホントに大変なんですよ。『ヘラクレス』の反応が消えました。」
キーを叩きながら、監視員が言う。
「何だって！？すぐに調査を開始しろ！」
「もうやってますよ！」
監視員全員が一斉に答えた。そして、日本支局
「破阿！」
小次郎の横薙が閃いた。
「！」
ガキッと音を立てて武蔵が受ける。
そして小次郎を押し返すと、間髪入れずに右手に持った木刀を、斜めに振り下ろす。
小次郎は体勢を崩しながら、自分の木刀で弾き上げると、すぐに峰を返して、己の脇腹目掛けて繰り出された、武蔵の左の木刀を受け

る。
そして一足跳び退き、体勢を立て直す。
武蔵も構えを直した。
そのまま、二人は暫く動こうとしない。
不意に武蔵が木刀を下ろし、構えを解いた。
「ふう。この様に思い切り動いたのは久方ぶりだ。」

「まったくです。」

言いながら小次郎も構えを解く。

二人が蘇ってから、すでに三日が経っていた。

その間二人は、エージェントとしての心得やら、職員の顔合わせやらで自然とストレスを溜めていた。

今日は、ストレス発散も兼ねて、二人で木刀打ちの稽古をしていたのだ。

「エージェントと言っても、あまり仕事は無い様ですからね。」

「他の者が仕事をしているのだろう。」
考えてみれば、二人は未だ“新人”なのである。
新人の二人には、まだ仕事は回ってきていなかった。　と、そんな話をしていると、
「何！？」
牧野の声が響いてきた。
牧野は自分に掛かってきた電話をとった。

その電話を掛けてきた主の言葉が、牧野を驚かせ、思わず叫んでしまった。
「どう言う事です。」
牧野は、ディスク用の電話が映し出した、立体映像に説明を求めた。
「だから、言った通りですよ。」
映し出されたのは、日本支局局長、荒木の温和そうな顔だった。
「言った通りって、『劉備』も『ヘラクレス』も、我々日本支局の管轄外でしょう。何故私が調査をしなければならないんですか！？」
局長に対して牧野は怒鳴った。
「まあまあ、落ち着いて。」
荒木は牧野を宥めると、
「それがね、中国支局もヨーロッパ支局も、調査は行ったようだよ。それで判明した事なんだけどね。どうやら、『劉備』と『ヘラクレス』の失踪前に、日本人と思われる男が居たそうなんだ。」と、説明する。
「日本人……。そいつは妙だ。」
牧野は顎に手をやり、真剣な顔で言った。
「そうでしょう？悪いけれど、牧野君に調査をお願いしたいのですよ。」
荒木は命令ではなく、“お願い”をする。　こう言われると、牧野は断れない。
「解りました。それでは、すぐに調査を開始いたします。」
「宜しくね。」
牧野は敬礼をしながら、電話を切った。
「はあ。」
牧野は溜め息をついた。
「どうしマシタ？」
マリアが牧野の顔を覗き込む。
いつの間にか、マリアと武蔵小次郎の三人は、牧野の叫び声に集ま

っていたのだ。
「なぁに、少々厄介な仕事が入っちまってな。」
そう言いながら牧野は、ヨレヨレのワイシャツとくたびれたネクタイを直し、上からコートを羽織った。そして、手櫛でさっと髪を直し、
「それじゃあ、行ってくるぜ」
と言いながら颯爽と部屋を出ていった。
「眉目は良いのだがな。」
武蔵が呟き、牧野の背中を見送る。
「エージェントとして蘇り、既に三日。仕事らしい仕事が無い様ですが？」
牧野を見送ると、小次郎はマリアに訊ねた。
「ハイ。新人にはナカナカ仕事が来ないデス。」
マリアが悲しそうに言う。
「やはり。その様な事だと思いましたよ。まあ、仕方の無い事です。」
小次郎はフォローを忘れない。しかし、
「これだけ何も無いと、退屈だな。」
武蔵が言ってしまう。
「ｓｏｒｒｙ。ごめんなサイ……。」
「おいおい。落ち込むなよ。」
武蔵が慌ててマリアを励ます。
「この世界の事を学ぶのも楽しき事です。」
小次郎が武蔵に助け船を出した。
「そうだ。知らぬ事だらけだからな。」

「おい、御三人方。」
突然男の声が、三人の会話に割って入った。
「ハイ？何デスか？」
マリアが男に訊ねる。　男はマリアと同じ巡視員だ。

「局長から電話だぞ。」
「ハーイ！O・K！ありがとデス。」
マリアは男に感謝の言葉を言うと、自分のディスクに行き、電話をとった。
すると、たちまち局長の立体映像が現れる。
「おぉ。」
武蔵が驚いて一歩退く。
「いつ見ても馴れませんね。」
小次郎も眉をしかめた。
「ガハハハッ。この位で驚いては困るよ。」
荒木は二人の反応に楽しそうに笑う。
それにつられる様に、マリアの機嫌も治った様だ。一仕切り笑うと
「所で、」
荒木が切り出した。
「マリア君達の初仕事だ。」
「仕事デスね！？」
マリアが思わず叫んだ。待ちに待った初仕事だ。
「そうだよ。退屈だっただろう？本来なら、僅か三日で仕事が来る事は無いのだけれどね。」
荒木が説明を始める。
「色々と問題が生じてしまってね。ここだけの話」
立体映像の荒木が、手の平を口の横に当てて、内緒話をする様に身を屈め
「エージェントが一人、逃亡してしまったのだよ。」
日本支局の体面に関わるからだろうか。
荒木は他の人間に聞こえない様に、声のトーンを落として言った。
「其奴を捕獲、若しく斬るのが仕事か？」
武蔵は腰の刀に手をやり、低い声で荒木に訊いた。
小次郎も、冷静な顔をしてはいるが、そっと刀の柄に手を置いた。

「いやいや、そんな物騒な仕事じゃないよ。」
荒木が明るい声に戻って言った。
「君達の初仕事は、邪馬台国の調査だ。ちょっとした仕事だけれどね。やってくれるかい？」

「ｗｈａｔ？ヤマタイ国？」
マリアが訊く。
「そう、邪馬台国だ。大昔の日本だよ。」
荒木が答えた。
「調査……ですか。」
小次郎が腑に落ちない様子で呟いた。
「少し気になる事があってね。もちろん、異変があればその場で対応してもらうよ？」
荒木が説明の補足をする。
「まあ、何にせよ、動かぬより良かろう」
武蔵がニヤリと笑う。
「そうですね。」
小次郎も同意した。
「二人はやる気のようだね。マリア君はどうだい？」
荒木はマリアを見やりながら言った。
「ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ！もちろんデス！がんばりマス！」
マリアはそう言いながわ敬礼する。
「うんうん。」
荒木は満足そうに頷くと、
「頑張ってくれ給えよ。」
そう言って電話を切った。

第五話　異変（後書き）

さあ、次回はどうなるか！　らくださん、タッチ！！

第六話　いざ、過去へ（前書き）

まいど、らくだです。いよいよマリア達の初仕事！

第六話　いざ、過去へ

荒木から報告を受けたマリアは、部屋の隅に置いてあるファックス型の機械のカード差込口に、巡視員に与えられているカードを通した。すると機械から用紙が一枚出てくる。巡視員はこの機械から仕事の詳細を受け取るのだ。

「この紙に邪馬台国の異変についての詳細が記されているのですね？」

マリアの後ろから紙を覗いていた小次郎が訊く。

「イエース」

マリアはニッコリと頷いた。

そこにはこう記されていた。

――報告書　（西暦２４７年）当時の九州一帯を治めていた邪馬台国が、何かの原因で南九州を治める狗奴国に滅ぼされ、邪馬台国の女王卑弥呼、並びに侍女の壱与が殺されました。今のところ歴史変動の波はそれほど大きくありませんが、近く歴史に大きな歪みをもたらすと推測されます。至急原因をつきとめ、事態の収拾にむかってください。

「殺された人、何ていう名前デスか？　漢字読めまセーン」

「ヒミコとイヨだよ。まったく……大丈夫かよ、こんなのがカシラで」

武蔵が心配そうな顔で言った。

「しょうがないデース、ワタシ日本に来たのこれが始めてダヨ」

マリアは膨れっ面で咎め、武蔵の肩をしたたかに叩いた。

「痛……こいつ、バカ力女め！」

「バカとは何デスか！　バカと言ったほうがバカ　デース！」

「二人ともやめてください」

呆れて小次郎が割って入る。
「喧嘩をしている場合じゃないでしょう」
小次郎はまるで学校の先生のように二人を叱った。
「ス、スミマセン」
マリアと武蔵は声を揃えて反省した。
小次郎は溜息をつき、言った。
「とにかく、我々は邪馬台国が滅びる以前の時代に行き、そこで何が起こったのかを突き止めるべきですね」

任務を受けたマリア一行が向かったのは、『タイム・ゲート』を開くための部屋”ステーション・ホール”。内部は、訳の分からない機械で埋め尽くされていて、意外と狭い。
「服装は、転送後に自動的に当時の物に替えられます」
係りの職員の男が説明した。
「ではお二人ともお入りください」
職員は武蔵と小次郎を促した。
「お、おう」
「初仕事ですね、緊張します」
武蔵と小次郎は心配そうに頷いて、部屋に入った。
と。
「ちょっと待ってくだサーイ！」
呼びとめたのはマリアだった。
「何です？」
「ワタシも行きマース！　昔の日本見てみたいデス」
マリアは職員に訴えた。
「巡視員がついて行っちゃいけないなんて規則はありまセン」
「し、しかし……」
「ノー・プロブレム！　ワタシは平気デース」
「……」
職員は困って考え込んでしまった。

「おい、あの女何言ってんだ？」
武蔵は小次郎に問いかけた。ステーション・ホールの中では、外の会話は聞こえない。
「多分、私達について行くと言っているのでしょう」
小次郎はげんなりとして答えた。
「冗談じゃねえ！　あんなのがついてきたら余計ややこしくなる」
武蔵は吐き捨てた。
「私も、そう思いますが……」
小次郎も同意するが、どこか諦めムードだ。
「う～ん……分かりました」
やがて職員はマリアの気迫に圧されるかたちで承諾し、「それではこれを腕に着けて行って下さい」と、綺麗な装飾が施されたブレスレットをマリアに渡した。
「何デスか、コレは？」
マリアがそれを手に取り、珍しそうに眺めながら訊くと、職員は「タイム・ゲートを作り出す装置です」と答えた。これがあると、自在に過去の空間にタイム・ゲートが作り出せるのだと言う。
「身の危険を感じたら、すぐに返ってきてください」
「分かりマーシタ、アリガト」
マリアは礼を言って、職員の頬にキスをした。
職員は見る見るトマトのように赤い顔になり、まるで夢を見ているような生気の抜けた顔になった。
「さ、行くデース」
「げ、やっぱり来やがった！」
ホールにマリアが詰め入ってきて、武蔵が悲鳴をあげた。
「三世紀の日本、楽しみ～」
マリアはルンルンと鼻を鳴らした。
「仕様がない……諦めましょう」
小次郎は楽しそうなマリアを見て苦笑した。
『それでは転送を開始します』

ホール内に職員のアナウンスが響いた。
『場所は西暦２４６年の北九州です、邪馬台国が滅びる一年前になります。準備はよろしいですか？』
「おう！」
と武蔵。
「いつでも」
これは小次郎。
「ＯＫ～」
マリアもブレスレットを左手に着けて答える。
『では、転送を開始します』
職員が言うと、ホール内が一瞬にして白い光に包まれた。
全員が眩しさに目を瞑る。
そして、光が収まったとき、三人は見知らぬ場所に立っていることに気づくのだった。

＊

鼻をくすぐる草の香りに武蔵が目を開けると、そこは広大な草原であった。遥か遠くに山脈が見えるだけで、下は延々と草の海だ。
「みんな、居るか！？」
呼びかけると、まず小次郎が答えた。
「ここです」
足元から声がした。そして、草の中から小次郎がむくりと体を起こす。
武蔵は彼が立ち上がるのに手を貸した。
「これが、当時の服装ですか」
小次郎は言って自分の服の袖を引っ張った。生地は麻と動物の皮で出来ている。肌触りがよく、柔らかいので動きやすい。
「刀は持っているな」

武蔵は自分の腰の物と小次郎の物を見比べて安堵した。
「彼女は、何処でしょう？」
小次郎は辺りを見渡した。マリアの姿はない。
「近くに居るはずだが」
武蔵も言って彼女の姿を探す。
「居ましたよ！」
小次郎が声をあげる。
案の定、マリアは近くの草の中に倒れていた。気を失っているらしい。彼女もやはり、武蔵たちと同じような服装をしていた。しかし、彼女はズボンの代わりにスカートを穿いていて、その丈がまた短い。小次郎は、目のやり場に困っていた。
「ったく、面倒かけさせやがって」
武蔵は内心安心して駆け寄った。しかし、近寄った武蔵はマリアを見て息を呑んだ。マリアの髪の毛が黒くなっている。
「う……うぅん」
マリアは二人の声に反応して喉を鳴らし、そして目を覚ました。目も黒い。
「あ、コジロー、ムサシ……グッモーニン」
マリアは微笑んで身を起こした。
「おまえ、髪が黒くなってるぞ。それに目も」
「え？」
武蔵の指摘に、マリアは上着の内側から手鏡を取り出し、自分の顔を映した。とたんに歓喜の声をあげる。
「ワオ！　まるで日本人みたいデース」
髪や目をくしたのは、当時の人々に違和感を与えないための、センターの配慮だろう。マリアは、はしゃいで飛び起きた。その勢いでスカートが捲れ、下着が見える。武蔵と小次郎は慌てて目を伏せた。
「ん～？」
マリアは武蔵たちの反応に、始めて自分の下半身を見た。そして

さらにはしゃぐ。
「アハハハ、セクシー・ドレース」
言いながらクルクル回転する。スカートが余計ヒラヒラして、小次郎は後ろを向いた。
と、小次郎の隣で、何かがドシンと音を立てて倒れた。
「はぁ、武蔵！」
倒れたのは武蔵だった。小次郎は倒れた武蔵を見て悲鳴をあげる。
「どーしマシタ？」
異変に気づいたマリアが駆け寄る。
見ると、倒れた武蔵は、鼻血を流しながら白目をむいていた。
「こ、これは……」
小次郎は、その様子を見て、どっと疲れを覚えた。
「ナルホド」
マリアは頷いて、こう明言した。
「ムサシは意外とスケベ　デスね～♪」

第六話　いざ、過去へ（後書き）

武蔵はスケベ！？　次回をお楽しみに！

第七話　邪馬台国（前書き）

御免なさい！こんなに時間が掛かったのには訳が！訳が！言い訳が！……。見苦しい真似は辞めて……。それでは、ＣＩＰＨＥＲが書いた『第七話』どうぞー（＾ｏ＾）／

第七話　邪馬台国

「全く、この状況で気絶ですか。」
小次郎は、ヤレヤレと言う様に首を振った。
「取り敢えず、邪馬台国に行ってみましょう。武蔵を休ませなければなりませんし。」
小次郎はそう言うと、武蔵を軽々と背負い、歩きだした。
「ｗａｉｔ！コジロー。待って下サーイ！」
マリアが小次郎を呼び止める。
「どうしました？この様な場所に、いつまでいても無意味でしょう？」
小次郎が、不思議そうにマリアを振り返る。
「ココ、どこか解りまセーン。ヤマタイ国の場所も、さっぱりデース。」
マリアが、もっともな事を言う。
「うっ。」
小次郎はどうやら、そこまで頭が回らなかった様だ。
「アハハッ！マリア、コジローより頭良い！」
マリアがクルクル回りながら喜ぶ。
回る度に下着が見えるのだが、お構い無しだ。
（どうも調子狂うな……）　小次郎がボケをやらかしたのは、多少なりともマリアが原因ではあるのだが……。
「さて、どうしましょう。」
小次郎はそれでも冷静に言う。　しかし答えは出ていない。
「なぁ、アンタ等、何者だい？」
困り果てている二人に、突然背後から男の子の声がした。　二人は驚きながら振り返る。
「見かけない顔だ。変なもん持ってるし。」
少年は、小次郎の刀を指差して言った。

少年は十歳くらいだろうか。顔に入れ墨を入れていた。
「ｈｉ！ヤマタイ国の子ネ？」
マリアが子供に訊ねる。マリア独特の笑顔だ。
「そうだよ。オイラ、那癸ーナキーってんだ。」
マリアの笑顔に心を許したのだろう。那癸は自己紹介をし、ニコリと笑った。
「拙者の名は、佐々木小次郎。」
小次郎は、名乗られて反射的に名乗り返す。
「私の名前はマリアデース！」
　続いてマリアが名乗る。
「変わった名前だな。えっと……、マリアに……」
「小次郎でござる。次いで」
小次郎は背中の武蔵を、那癸に見える様に体を捻る。
「この男は武蔵と申す。」
武蔵はまだ目を回している。
「小次郎、武蔵……と。」
那癸は指差し確認をして、二人の名前を覚え込んだ様だ。
「童よ。この男を介抱したい。集落などに案内して頂きたいのだが。」
小次郎は自分の身元を明かさず、那癸に邪馬台国への案内を頼んだ。
「お願いしマース。」
マリアも那癸に頼む。
「良いけど……、アンタ等、変な話し方だな。ハハハッ」
そう言って那癸は笑った。
「そうでしょうか？」
「コジロー、話し方固いヨー。」
マリアが
「アハハ」
と笑った。自覚が無い様である。

「ま、良っか。付いて来な。」
那癸は、馴れた様に草原を進む。
子供とは思えない早さだ。　マリア達はその後を追う。
「どうやら、武蔵が気絶してくれたお陰で、未来からのエージェントだと明かさずに、邪馬台国に着けそうですね。」
小次郎は那癸に聞こえない様に、マリアに言った。
「ヤマタイ国。楽しみデース！」
マリアは仕事だと言う事を、スッカリ忘れてしまった様にウキウキしている。
「はぁ～。」
小次郎は溜め息をつき、頭を抱えた。
本当に、先が思いやられる……。
―卑弥呼宮殿―桜観―物見櫓―と城柵、屈強な兵士達で厳重に守られた、木造だが立派な宮殿。
その中の、更に奥まった処にある、卑弥呼の祈祷所。
この中には、老いた邪馬台国の女王“卑弥呼”と連絡役の男が一人いるだけだ。
鬼道を操る卑弥呼は、神託を受ける為の占いを始めようとしていた。
「卑弥呼様。お願い致します。」
「うむ。」
卑弥呼は、赤々と燃える炎の中に、獣の甲骨をいれた。
そして、怪しげな呪文を唱える。　どれ程の時間が経っただろうか。
「恰っ」
卑弥呼は気合いを発した。
すると、くべられた甲骨にビシッとひびが入る。
その甲骨を、先端が鈎型に曲がった棒で取り出した。
「なんと……。」
ひびの様子を見た卑弥呼が、驚きの声を漏らした。

「如何されましたか？」
男が恐る恐る訊く。
「ぬぬっ。」
卑弥呼は信じられないモノを見る様に、マジマジと甲骨に入ったひびを見、
「これは凶兆じゃ……。」
と、うめいた。
「凶兆とは！？」
男が訊ねる。
「太陽が欠けるぞ！陽が月に喰われる！」
卑弥呼はそう叫び声を上げる。　そして
「邪馬台を狗奴が喰うのじゃ。」
そう言って、気を失った。
―邪馬台国―那癸に案内され、三人は邪馬台国に辿り着いた。
「しかし、我々が居た処は、存外邪馬台国に近かったのですね。」
殆ど歩かなかったので、小次郎が驚いた。
「当たり前だろぉ？そんなに遠くに一人で行かないよ。」
那癸が言う。
「そ、それもそうですね。」
小次郎は納得して、改めて邪馬台国を見回した。
「ヤマタイ国！凄いネ！」
マリアがはしゃぎ始めた。
無理も無い。何せ邪馬台国は、二人が思っていたより広大だったからだ。
「これは、予想外でした。最大の国とは言え……。」
小次郎が思わず呟いた。
邪馬台国は、いわゆる環濠集落だ。入り口に、深い濠が掘ってある。
「オイラの家に向かうけど、ついでに案内してやるよ！」
那癸は元気良く言った。

珍しそうに辺りを見回すマリアと小次郎に気付いたのだろう。
「ホントに？」
マリアが目を輝かせる。
「それはかたじけない。」
小次郎は那癸にガイド役を頼んだ。
「ハハハッ！やっぱり変な話し方だ。」
那癸は笑いながら先頭を歩く。
「何か聞きたい事が在ったら言ってくれよ。」
三人は濠を渡り切った。

濠の内側には数え切れないほどの民家がある。
民家の外観は、あまり大きくはなく、屋根を茅で覆っている。
「内部はどうなっているのです？」
小次郎が訊いた。
「内部？家ん中か？」
那癸が変な顔をした。
「どうなってるって、普通だよ。床掘って、柱立てて、真ん中に炉があんの。」
那癸は、当然と言う風に答えた。
この時代の一般的な民家の形、竪穴式住居だ。
「成る程。」

小次郎は何度か頷く。
マリアは話を聞いているのか、しきりと辺りをキョロキョロしている。全ての物が珍しいのだろう。
「見た処、小規模な稲作なども行っているようですね。」
「当たり前だろ？変な事ばっかり訊いて。一体兄ちゃん達どっから来たんだ？」
那癸が眉をしかめて小次郎を見た。
「そ、それは……。」
小次郎が口籠る。未来から来たなどと言って、歴史が変わりはせぬか……。
「ま、いいや。悪い奴じゃなさそうだし。」
那癸が勝手に納得した。小次郎は、内心ほっと胸を撫で下ろす。
「ｈｉ！ナキ！アレは何デスカ？」
マリアが那癸を呼び、一点を指差した。
「アレか？やっと真面な質問だな。」
那癸は満足そうにニッと笑った。
「アレはな、卑弥呼様の宮殿さ。」
宮殿と言うには、少々小さな気もするが、それでも民家と比べると、かなり大きな建物があった。
民家との違いは大きさだけではない。
明らかに竪穴式住居ではなく、しっかりとした箱型住居だった。
集落の丁度中心だ。
「随分と厳重な警護ですね。」
卑弥呼宮の周りに張り巡らされた柵と、重装をした兵士、そして、宮殿よりも高くそびえる物見櫓を見て、小次郎は感心した様に呟く。
「そりゃそうさ。卑弥呼様は邪馬台国の女王だからな。」
「ヒミコ、どんな人なんデスカ？」

マリアが訊いた。
「う～ん。よく解んねぇや。卑弥呼様は外に出ねぇんだ。ただ、卑弥呼様は鬼道の使い手で、占いは外れた試しが無いんだ。」
那癸が説明する。
「鬼道……。」
コジローが眉を寄せ考え込んだ。
「呪術の類だろうか……。」
誰にも聞こえない位の声で呟く。いずれにしても、ただの女王ではなさそうだ。
「キドー、凄いネ！」
マリアには深い考えは無いのだろうか？などと、小次郎の考えが脱線し掛けた時だ。
「二人とも、オイラん家に着いたぞ！」
那癸が一つの民家の前で手招きをした。
場所は変わって狗奴国の一角。　三人の男が身を隠す様に集まっていた。
「しかし、何故邪馬台国などと言う、文化の遅れた小国を滅ぼそうとするのです？」
劉が言った。
「なーに、簡単な事よ。この“邪馬台”っちゅう国は、良くも悪くも日本の基盤になる国っとぉ考えちょる。ワシは日本人として、まず日本を変えたいのよぉ。ワシ等の理想郷は、邪馬台から始まるんぜよ！」
男は自信に溢れた顔で、劉とヘラクレスを見回す。
「しかし、」
ヘラクレスが口を開いた。
「何故、我々ではなく、狗奴国の人間を使い滅ぼすのだ？」
男はニヤリと笑う。
「ヘラクレスよ。貴殿は全く解っとらんのぉ。」
「一国を倒すのは、並大抵の事じゃない。」

劉が引き継ぎ説明をする。
「そうじゃ。だが、それだけでは完璧な説明とは言えんのう。ワシ等が直接、卑弥呼と壱与を暗殺するんは存外簡単なことぜよ。」
男は更に補足をする。
「ワシ等の様な奴を、駆逐する『えぇじぇんと』ちゅうんが居っての。ソイツ等ん目を誤魔化す為でもあるんじゃ。ワシ等が直接手を下すと、歪みが大きくなっての。ソイツ等に見つかり易くなってしまう。邪魔されちょう堪らんからのぉ。」
男が捲し立てる様に言う。　その場に居る者を、納得させる力があった。
「我々に出来る事は、狗奴国に語り掛けるだけだと？」
劉が訊ねた。
「そう急くな。ワシ等にしか出来ん事ぁ、いくらでも在る。」
男は不敵に笑った。

第七話　邪馬台国（後書き）

うーん……、長い！いらんとこ多いし……。疲れたでしょ？まあまあ、次の話までお茶でもどうぞ。且~~

第八話　古の民（前書き）

ども～、らくだ参上！　長いけど読んでちょ♪

第八話　古の民

那癸に連れられて、マリア一行は彼の家にやってきた。
「父ちゃん、居るかい？」
那癸は家の中に呼びかけた。すぐに返事はあった。
「おう、那癸か」
家の中から、髭をぼうぼうに生やした男がのそりと姿を現した。年頃は三十半ばといったところか。毎日農作業をしているためか、日に焼けた体はかなり筋肉質だ。
「お客さんだよ」
那癸はマリア達を紹介した。
「どうも、小次郎といいます」
「マリア　デース。こっちがムサシ」
二人は父親に挨拶がてら名乗った。武蔵はまだ目を覚ましていない。
「おう、よろしくな。俺はこいつの親父で伊日留（イカル）ってんだ。しかし変な名前だな、あんた達。異国の人か？」
伊日留は髭面に満面の笑みをたたえて、二人と握手を交わした。異国の人か、という彼の疑問には、小次郎は「まあ、そんなところです」と適当にはぐらかした。
「そこのムサシって人はどうしたんだい？」
伊日留は小次郎に背負われている武蔵を見て言った。
「この人達、異国から来て迷っちゃったんだってさ。で、ムサシは腹が減って目ぇ回して倒れたんだって」
那癸は父に説明した。このことは、先程小次郎が那癸に仕込んだのだ。
「ガハハハ、腹が減ってか！　そいつは大変だ。まあ、遠慮はいらねえからこっち入んな」
伊日留はあっさりとそれを信じて、マリア達を受け入れた。武蔵

が気を失ってくれたことが、逆に那癸一家の同情を誘う結果となったのであろう。
「それでは、お言葉に甘えて」
「失礼するデース」
マリア達は伊日留にすすめられるまま、家の中に入っていった。

その夜、那癸の家ではマリア達のために宴が開かれた。今宵の食事は、まるまる一匹の大猪の肉と、色とりどりの果物であった。
「ワハハハハハ、もっと酒持って来い！」
米酒の入った杯を掲げ、武蔵がすっかり出来上がった様子で大声をあげている。
「ガハハハハ、ムサシはなかなか愉快な男だ！」
こちらも負けじと伊日留が騒いでいる。二人は、武蔵は目覚めてから、性格の似ていることで意気投合して、それからずっとこの調子だ。
「あ～あ……我が家に五月蝿いのが一人増えちゃったよ」
那癸が二人の後ろで肉を食らいながら愚痴る。
「まったく……暢気なものですね」
家の隅で二人の様子を眺めている小次郎は、リンゴを齧りながら静かに呟いた。
「ほんとダヨ、ムサシは自分の仕事を完全に忘れてマース」
梨を片手に、小次郎の横に腰を下ろしたマリアが、まるで他人事のように言う。自分も先程まで邪馬台国の街並みにはしゃいでいたことなど、もはや記憶にないらしい。
「あら、仕事って何のことですの？」
マリアと小次郎の会話を傍で聞いていた那癸の母親――可留根（カルネ）が、興味深げに口を挟んできた。二十歳半ばの、柔らかい物腰の女性である。全く彼女の気配に気づいていなかった二人は、突然声をかけられて飛び跳ねた。
「き、聞いていたんですか！？」

小次郎が蒼い顔で悲鳴混じりの声を漏らす。
「途中までですけど」
可留根は小首を傾げて言った。
「で、仕事って何ですの？」
可留根はなおも訊いてくる。
「ええと……ええと……（コジロー、どうしマスか！？）」
マリアはおろおろと小次郎の袖を引っ張って、押し殺した声で助けを乞う。小次郎も困って黙りこんでしまった。可留根はまだ二人に興味を持っている。
そんな二人を窮地から救ったのは、またしても武蔵だった。
「おおい、二人とも！　こっち来て一杯やれよ！」
武蔵が大声でマリア達を呼ぶ。
「ああ、しかし……」
小次郎は武蔵と可留根を見比べて言葉を詰まらせた。
「あ、私のことならお気になさらず。主人達のお相手をしてあげてくださいな。お話は、また今度にでも」
可留根は笑顔を見せてそう告げた。
「忝い。マリア、行きましょう」
「ハ～イ」
二人は彼女に軽く会釈してその場を離れた。
「おう、小次郎、お前も飲め！」
武蔵が、やってきた小次郎に酒をすすめた。
「はあ……私はあまり酒は強くないのですが……」
「まあそう言わず、グイっと！」
伊日留も煽ぐ。
「むぅ……では！」
小次郎は気合を発すると、一気に中味を飲み干した。
「お、いい飲みっぷり！」
武蔵と伊日留が同時に囃した。ところが、酒を飲み終えた小次郎は、「げぷッ！」と大きなゲップを一つすると、ぐらりと頭を揺ら

せて、そのまま倒れてしまった。
「なんでぇ、情けねえ」
武蔵がからから笑いながら小次郎の肩を叩いた。小次郎は、もう眠っている。
「ガハハ、今度はそっちのアンちゃんが倒れちまったよ！　おい、次はネエちゃんの番だぜ」
伊日留は言ってマリアに杯を押し付けた。
「ワタシお酒飲んだことありませン」
マリアは戸惑いつつ、差し出された杯を受け取った。
「ハハハ、本当かい？　酒なんてのはな、グイッと一気に喉に流し込むもんだよ」
伊日留は言って手本を見せた。一気に呷る。
「Ｏｈ、ナルホド。じゃあ、やってみマス」
マリアは言われるままに杯に口をつけた。武蔵と伊日留が「いっき！　いっき！」と囃し立てる。
マリアは片手を突き上げて、その体勢のまま杯を傾けた。ボタボタと溢れる酒が口から零れる。

ゴク、ゴク、ゴク、ゴク……

「ぷは～！」
全部飲み干したマリアは、口を拭って歓喜の声を発した。
「お、こっちのネエちゃんはいける口だ！」
「こいつ、オッサンか」
武蔵と伊日留はその飲みっぷりに感嘆の声をあげる。
しかし、マリアの目つきは、何処か妖しいものに変わっていた。
「おい、こいつ目が据わってるぜ！」
異変に気づいた武蔵が叫ぶ。
「五月蝿い、ムサシ！」
マリアは自分の顔を覗きこむ武蔵の顔を押しのけて突然怒鳴った。

「ギャア、何しやがる！」
武蔵は顔を押さえて悲鳴をあげた。
「シャ～ラップ！　おい、イカル、もっと酒もってこ～い！！」
「おいおい、こりゃえらい酒乱だ」
マリアに肩を組まれながら、伊日留は少し怯えたような表情でうめく。
「ＯＫ～、今夜はとことんやりましょ～！」
マリアは新たな杯を片手に大声を張り上げた。
「やれやれ、また五月蝿いのが一人……」
マリアの暴れっぷりを眺めながら、那癸はボソリと呟いた。

＊

翌日、朝一番早く目を覚ましたのは小次郎だった。
「う……」
小次郎は二日酔いで痛む頭を抱えて半身を起こした。
（これだから酒は嫌いなのだ……）
胸中でうめきながら周りを見渡す。彼の傍にはマリアをはじめ、武蔵、伊日留がだらしない格好で眠っていた。那癸と可留根だけが、毛皮の毛布を巻いて眠っている。
頭が覚醒するにつれて、小次郎は激しい吐き気を催してきた。
（外に出よう）
新鮮な空気を求め、彼は刀の『物干し竿』を持って家を出た。
「まだ夜明け前ではないか」
空を見上げて呟く。空は東の方が僅かに白んでいるだけで、まだ太陽は見えない。
めいっぱい深呼吸をすると、少しだけではあるが吐き気が薄らいだ。
「少し、歩いてみるか」

言って歩を進める。とはいっても、なんの意図もないので、ただ適当な方向に進むだけだが。
しばらく歩いていると、昨日見かけた大きな建物を見つけた。
（あれは確か、卑弥呼の宮殿……）
暗がりのその宮殿はどんよりと佇んでいて、どこか近づき難い雰囲気があった。
（あの中に卑弥呼が……）
胸中で言って、宮殿を見つめる。
と、小次郎の耳に、水が流れる音が入ってきた。
川でも流れているのか――耳を欹てるとそれは卑弥呼宮の後ろの林から聞えてくるもので、滝であることが分かった。
小次郎は好奇心にかられ、滝を見てみたくなった。幸い、というか、宮殿の警備は手薄で、門番が二人しかいない。これならば忍びこむのは容易い。
裏の林に回り込んだ小次郎は二メートルもの柵を飛び越えて、楽々敷地内に侵入できた。太陽が少し照ってきたので、林の中でも何とか歩ける。
（滝は、こっちのほうか）
小次郎は音を頼りに足を動かした。
やがて滝の音は大きくなり、数十メートル先で林が途切れている。滝はすぐそこなのだろう。
そして林から抜け出すと、その目の前には小さな滝があった。小次郎はその美しさに息を呑んだが、下の池に人を見つけて声を漏らしてしまった。
「あ……！」
「誰！？」
相手は機敏に反応して返してくる。見ると、池の畔で体半分を水に浸した全裸の少女が、傍らの巫女の装束で胸を隠し、片手に小刀を持って怯えた表情でこちらを睨んでいる。年は十五、六くらい。美しい黒髪は水面に浮いて下半身を隠すほど長く、肌はまるで絹の

ように白くきめ細かい。
「し、失礼、私は怪しい者ではござらん！　道に迷って、たまたまここに来てしまった！」
小次郎は目を伏せ、刀を地面に投げて両手を上げた。
「あなたは……何者？」
「こ、小次郎と申す。道に迷って往生していたところを、この街の伊日留一家に救われ、一晩泊めていただいた」
少女の問いに小次郎は素直に名乗った。
「それでは、狗奴国の手先ではないのですね？」
少女は質した。
（狗奴国――）
その名を聞いて、小次郎は自分に与えられた任務を思い出し、もしやと思い、少女の名を訊いてみた。
「そなたの名は何というのですか？」
「え？」
少女は一瞬躊躇したような気配を見せ、しかし考えた後、こう答えた。
「私の名は、壱与と申します」

第八話　古の民（後書き）

壱与、裸！？（；´д`）　早く次行こう！！

第九話　飛燕再臨（前書き）

ＣＩＰＨＥＲです！早く！早く！壱与ちゃんに服を着せないと！（＜＿＞）

第九話　飛燕再臨

さわさわと風が吹く。
「やはり。」
小次郎は呟いた。
「何が“やはり”なのです？」
壱与が訝しそうに訊く。　（聞こえてしまったのか！）
「いや、それは……。」
小次郎は慌てて弁解しようとする。その際、思わず顔を上げてしまった。
「ちょっ！」
それを見て壱与はすぐ様後ろを向いた。
「何なのです。覗きですか！」
壱与が怒って言った。
「いえ！決してその様な……。」
再び小次郎は目を伏せる。
「後ろを向いて。」
壱与が言う。
「承知。」
小次郎は、言われてすぐに後ろを向いた。
（しかし、滝の音があるにも関わらず。
よく先程の呟きが聞こえたな……）　等と小次郎が考えていると、後ろ、つまり壱与が居る辺りからパシャパシャと音がし、布の擦れる音がした。
「もう、良いですよ。」
壱与から声が掛かる。
「う、うむ。」
小次郎は緊張しながら、ゆっくりと振り返る。
振り返った時、壱与は巫女の装束に身を包み、手にしていた小刀

を腰に挿していた。
「小次郎と言いましたね？道に迷ったとか。」
壱与は小次郎に訊いた。
疑っているわけでは無いのだろうが、しっかりと小刀の柄を握り、小次郎に近づこうとしない。
「うむ。異国から来てな。」
小次郎はどう説明しようか悩みながら口を開く。
「この邪馬台国と言う国にも全く不案内なのだ。」

「それなら、この国を早く離れた方が良い。今この国は、狗奴国といつ争いを起こすか解りません。」
壱与が真剣な顔で小次郎に言う。
「狗奴国と争い……。」
小次郎はゴクリと唾を飲み込んだ。
「しかし、今すぐこの国を離れるわけにはいきません。」
壱与に負けじと、真剣な顔で小次郎が言う。
「それは何故？」
壱与が返した。余程の事があるのかと、小次郎の顔をマジマジと見る。
「二日酔いで、頭が割れそうに痛い。」
「え？」
小次郎の答えに、壱与が思わず聞き直した。
「いや、無理に酒を飲んだので。」
小次郎が苦笑する。　壱与はその言葉を聞いて、一瞬驚いたが、すぐに笑い出す。
「アハハッ。小次郎さんて面白いんですね。」

「そうでしょうか？」
どうやら小次郎は、壱与と打ち解ける事に成功した様だ。
証拠に、壱与がいつの間にか小刀の柄から手を離している。

そして、小次郎の隣まで歩み寄ろうとする。
「小次郎さんは、邪馬台国まで一体何を……」
「しっ！！」
小次郎が砕けた様に話し掛ける壱与を、片手を上げて制した。
そしてゆっくりと屈んで、愛刀を掴み。更に林の中の一点をにらみつける。
「小次郎……さん？」
小次郎は、壱与の声が聞こえないかの様に動かない。　と、不意に
「っ！」
林の、小次郎がにらんでいた場所から、ツブテが飛んできた。
明らかに壱与目掛けて飛ぶツブテを、鞘から抜いていない『物干し竿』で叩き落とす。
「キャア！」
壱与が叫び声を上げる。
その間に、今度は別の方向からツブテが飛んできた。
敵の数は二人！　小次郎は瞬時に、飛んできたツブテを払いながら相手の位置を確認し、壱与に背を向け、庇う様に立つ。　壱与は、小次郎の背中にくっつく。
「怖いのは解ります。安心して見ていて下さい。」
小次郎が優しく壱与に言う。
壱与はそれを聞くと、そっと一歩退いて小次郎が動き易くする。
小次郎は鞘に納めたまま、刀を構えた。
そして敵の気配を伺う。
あまりに隙が無いからだろう。
二人の男が、ヌッと林の中から姿を表した。
その手には、鈍く光る剣が握られている。
「あれは！」
壱与が男達を見て叫び声を上げた。
「貴方達は狗奴国の！」

その顔に入った入れ墨は、狗奴国独特の紋様であった。
「ちっ！顔を見られる前に殺っちまうつもりだったのにな。」
右の男が言った。
「あんなのが居るなんて聞いてねえぞ！」
今度は左の男だ。どっちの男も、頭が悪そうな、基い、凶悪そうな顔をしている。
「聞いてない？何の事です？」
小次郎が眉を寄せ、二人の男に問う。
「オメェには関係ねぇだろ！」
左の男が言い放った。
「で？こんな時、どうするんだ？」
さっきの勢いは何処へやら、又々左の男が右の男に訊ねる。
「オメェがさっき言ってたろ！」
右の男が左の男に怒鳴った。
「あんな奴は関係ねぇんだよ！」
右の男が小次郎を見ながら言う。
「関係無いとは……。」
小次郎が苦笑する。
「貴男方は何者なのです？」

「しつけぇなぁ！関係無いって……。」
「まあまあ、」
左の男が言い掛けた処で、右の男が宥めた。
「壱与と一緒に殺っちまえば良いのさ。」
右の男がニタリと笑って小次郎を見た。
「要するに、貴男方は刺客なのですね？」
会話をしていて、疾うに解っている事を、男達に確認した。
「はっはっはぁ。やっと気付いたか！」
左の男が笑い出す。
「もう、何も言うまい。」

小次郎は呆れて小声で言った。
「それじゃあ二人とも、死んで貰うぜ！」
右の男が叫ぶと、
「武器を持った者に、手加減は出来ませんよ。」
小次郎は刀を抜いた。
陽の光が白刃に反射する。
同時に小次郎の体から、殺気がほとばしった。
その殺気を受けて、刺客は一歩後ずさる。
「どうします？やりますか？」
小次郎が不敵に笑う。
「くそう！」
挑発され、刺客の二人は同時に小次郎に斬り掛かった。
しかし、何の型も出来ていない攻撃など、天才剣士である佐々木小次郎に当たるわけはなかった。
二人同時の攻撃を、体を少し開くだけで躱す。
刺客二人は無防備になった。
小次郎は刀を上段に降り上げ、向かって左の相手、右の男に、斜めに斬り掛かる。
敵も然る者、刺客に来るだけはある。
体勢を崩しながらも、小次郎の太刀筋に反応する。
小次郎の袈裟斬りを、剣で受け止めた……筈であった。
「覇阿！」
小次郎の刀が、受け止めた剣ごと、左の肩口から、右の脇腹まで真っ二つに斬り伏せる。
刺客の持っていた剣は銅剣であった。
鉄の刀を受け切らずに折れてしまったのだ。
勿論、小次郎の技量が圧倒的に勝っていた為に、物干し竿は刃こぼれ一つしていない。
「よ、よくもぉ！」
右の男が倒されてしまい、左の男は逆上して、小次郎を斬りに上

段に構える。
並の剣士ならば、虚を衝かれていただろう。
しかし小次郎は、相手が剣を降り下ろす前に刃を返し、驚異的な速さで相手の体を横薙に斬る。
袈裟斬りからの横薙。
降った刀の刃を、急激に反転させて斬る。　『秘剣　燕返し』
であった。
「ぎやあぁぁ！」
二人目の刺客が、断末魔の叫びを上げて倒れる。
たちまち、辺りに血の臭いが立ち籠める。
「す、凄い……。」
思わず壱与が呟いた。
「危ない処でした。」
小次郎はそう言いながら、失敬して倒れた刺客の服で、刀に着いた血を拭う。
「何故、貴女に刺客など放たれたのでしょう？」
刀を鞘に納めると、壱与を振り向いて訊ねる。
「それは……、私が次期女王だと噂されているからだと……。」
壱与は言いづらそうに口を開く。
「噂？」
「はい。飽くまで噂です。私が卑弥呼様に取って代わろうとしていると。」
壱与は小次郎に涙目になって訴える。
「卑弥呼様にも、この噂が耳に入っているらしく……。あからさまに邪険に扱われて！」
到頭、壱与は両手を顔に当て、泣きだしてしまう。
小次郎は何をして良いか解らず、ただオロオロしていた。
小次郎は何となく、壱与の両肩に、自分の両手を置く。

壱与が顔に当てた手を離し、小次郎の顔を真っ直ぐ見た。
小次郎も壱与の目を見返す。　と、

「叫び声がしたのはこっちだ！」

声と供に二人の男達が走ってきた。
格好を見ると、恐らく門衛の兵士だろう。

「あ、壱与様！」

走ってきた兵士の内、一人が言った。
「侵入者だ！武器を持っているぞ！」
小次郎は最初、抵抗しようと刀に手を掛けていたが、門衛の兵士だと解ると、両手を高く上げた。
「確かに侵入者ではあるかも知れません。しかし私は……。」
「黙れ！壱与様から離れろ！」
小次郎が弁解し終わる前に、兵士が遮った。
「違うの！小次郎さんは……」
壱与が険悪なムードの兵士に語り掛ける。
「弁解なら、後で幾らでも聞きましょう。オイ！そこの怪しい男を引っ立てろ！」
ずっと話していた兵士が、隣にいる兵士に命令した。
「はっ！」
命令を受けた兵士が返事をし、小次郎に近づく。
「ちょっと待って！」
壱与が止めようとするが、兵士は小次郎の腕を後ろ手に縛り、刀を取り上げた。
「小次郎さん、何で抵抗しないの？」
「抵抗しても仕方無いでしょ？」

小次郎は壱与にニコリと笑いかける。
「後で返して下さいよ。」
刀を抜いた兵士に、小次郎が話しかける。　顔は笑っているが、目が座っていた。
「ひっ。」
恐怖で思わず声を上げてしまう。
「何をやっている！早く引っ立てろ！」
「済みません！」
兵士が気を取り直し、小次郎に縄を掛け、引っ張る。　小次郎は始終無抵抗であった。
「小次郎さん！」
壱与が後ろから声を掛ける。
振り返る小次郎。　（貴男は命の恩人です。この恩は必ず。）　壱与の瞳が語っていた。

第九話　飛燕再臨（後書き）

書くの遅くて御免なさいm（__）m　壱与ちゃん風邪ひかないでね。　それでは、第十話に続きます。

第十話　邪馬台の支配者（前書き）

どぉもー（＾ｏ＾）／　ＣＩＰＨＥＲ２連続で登場！　ま、理由は深く考えず。行ってみましょう！

第十話　邪馬台の支配者

「コジローがいないヨー！」
この日の朝が、マリアの叫び声で始まった。
「何だぁ？」
武蔵が不満そうに起きてきた。目をこすりながら、欠伸を噛み殺す。
「大変だヨ！コジローがいないヨ。」
武蔵の様子などお構い無しに、マリアが武蔵の襟首を掴む。
「お前！離しやがれ！」
「コジローが……」
マリアの手に更に力が籠る。
「良い加減にしろ！」
武蔵がたまらず叫んだ。
「どうした！」
伊日留が走り込んでくる。
後ろには那癸が居る。二人とも、何があったのかと心配そうな顔をしている。
「何でもねぇ。小次郎が居ないってんで、マリアが取り乱してるだけだ。」
武蔵が面倒臭そうに二人に説明した。
「何でもなくないヨ！」
「ぐっ」
武蔵の襟が更に締まる。武蔵の顔がドンドン青ざめていく。
「オイ那癸！二人を引っ剥がすぞ！」
「うん！父ちゃん！」
伊日留親子に引き剥がされ、少し冷静になったマリアと武蔵が、向き合って座っている。更に伊日留親子が二人の間に座った。
「で？一体どうしたんだ？」

伊日留がマリアに説明を求める。
「起きたらコジロー消えてた。」
マリアが難しそうな顔をしながら答える。
「それだけか？」
伊日留が呆れ顔で更に訊く。
「ソレだけじゃなくて、何カ……。何カ違うヨ！」
マリアがまた取り乱してた。
「何が違うんだ馬鹿馬鹿しい！小次郎も餓鬼じゃねえんだ。一寸姿が見えないだけで心配してどうする。」
武蔵がマリアに言い聞かせる。
「でも……。何カ違うんだヨ。」
マリアが泣き出しそうな顔になってしまう。
「オイオイ、泣くなよ？」
武蔵が上半身だけで退け反る。
「泣かないヨ。ただ、何カ、上手く言えないだけダヨ。」
マリアは上手く言葉に出せなくて、焦ってしまっているようだ。
「マリア姉ちゃん。何か悪い予感でもするのか？」
那癸がマリアに何となく訊いてみた。
「ＹＥＳ！悪い予感！ソレ言いたかったデース！」
那癸の言葉が、自分の言いたかった事と一致して、マリアは大喜びで叫んだ。
「本当に悪い予感がしてるのかよ？」
マリアの様子を見て、武蔵がボソッと呟いた。ー卑弥呼宮ー
「あの男、怪しい者ではないと申すのか？」
卑弥呼が壱与に訊いた。訊いたと言うにはあまりにも強い口調である。
「はい。あの者は、私を狗奴国の刺客から守って下さったのです。」
壱与は、卑弥呼のこういう態度に馴れているのだろう。
卑弥呼の目を真っ直ぐに見返して言った。
「ほぉ。壱与を救ったと？」

卑弥呼の年老いた顔に、意地悪そうな笑みが浮かんだ。
「はい。」
壱与はそれに気付いてはいるが、何の反応も示さずに答える。
それを見て卑弥呼はニヤリと笑うと、
「可笑しいではないか。」
と、壱与に言い放つ。
「えっ？」
壱与が反応した。目で
「それは何故？」
と問う。
「可笑しいであろう？何故あの男は、この卑弥呼宮の敷地内に入ってきたのだ？」
卑弥呼は尚もニヤニヤと笑っている。
「そ、それは、道に迷われて……。」
壱与は小次郎に言われた理由を口にする。
「道に迷ったと？更に可笑しい。」
「何がそんなに可笑しいと？」
壱与は耐えかねて訊いた。
「解らんか？この宮殿に入るには、見張りの兵士と2メートルもの柵を越えなければならないのだぞ？道に迷っただけで、入り込むのは不可能であろう。」
卑弥呼が勝ち誇った様に捲し立てる。
「しかしそれは……」
「何じゃ。言うてみい！」
壱与が言い掛けたのを、卑弥呼が遮る。
「いえ……。何でもありません。」
壱与は目を伏せ、消え入る様に呟いた。
「しかし、あの小次郎と言う男。何か裏がありそうじゃのう。」
卑弥呼がニヤニヤと笑いながら言う。壱与には反論する事が出来なかった。

「もしや、狗奴国の刺客ではあるまいな。」
卑弥呼が突然、突拍子もない事を言い放つ。
「そんな！それは……」
「無いと言い切れるのか！」
またも、壱与が言い切る前に卑弥呼が遮った。
「しかし、小次郎さんが刺客なら、仲間を斬る必要はなかったでしょう。」
壱与は、今回は引き下がらずに卑弥呼に言った。
「それはどうかな？狙いは其方ではなく、妾かも知れんぞ？むしろその方が自然ではないか？」
「それは……」
確かにそうなのだ。
壱与は卑弥呼に仕える巫女の一人に過ぎない。
その壱与に刺客を向けるよりは、女王である卑弥呼に刺客を差し向けるのが自然である。
壱与は何も言えなくなってしまった。
「そうじゃのう……。厳しく糾弾せんといかんなぁ。」
卑弥呼が、意地悪そうに言う。
「糾弾なんて……。小次郎さんが何か悪いことでもしたのですか！？」
流石に壱与が反論する。　が、
「この戯けめが！！」
卑弥呼に一喝されてしまい黙り込んでしまった。
「何故、女王である妾ではなく、其方なぞに刺客が放たれるのじゃ！」
突然卑弥呼がヒステリックに怒鳴り出す。
「それは……」
以前から怒鳴る事はあったが、特に最近は酷い。
あまりの剣幕に、壱与は何も答えられない。
どうして良いか解らず、ただ目をキョロキョロさせるばかりだ。

「何じゃ！言うてみよ！狗奴国から其方に刺客が放たれる訳を！」
更に卑弥呼はわめき続ける。
「それは……。」
卑弥呼に怒鳴りられ、それしか言えない。
「何故言えぬ！それは、壱与、其方が妾に代わって女王になろうと言う噂が真実だからであろう！」
「決してその様な！それは只の噂に過ぎません！」
卑弥呼の発言に驚きながら、壱与が慌てて言う。
「嘘をつくな！もう良い！退れ！」
そう言いながら卑弥呼は、首に掛けた匂玉を壱与に投げつける。
神聖な匂玉を投げつけると言う事は、それだけ苛立っている証拠だ。
こうなったら手が付けられない。　壱与は小さな声で
「はい」
と呟くと、あまり音を立てない様に、ユックリと室を出ようとする。
それすらも気に入らないのか、卑弥呼が
「疾く退らぬか！」
と言い放つ。
その声を背に受け、壱与は室を出ていった。
壱与が室を出ていったため、室内は卑弥呼一人になった。
「壱与め。妾に代わって女王になろう等、思い上がりおって……。」
卑弥呼の顔は醜く歪んでいる。
「このままでは済まさぬぞ……」
歯噛みをしながら、卑弥呼が呟いた。
結局は壱与に対する嫉妬であった。
女王ではあるが、年老いてしまった卑弥呼。
しかし、壱与は若く美しく、鬼道に通ずる力も、卑弥呼に匹敵するものがある。

「さて、あの小次郎と言う男。どうしてやろうか……。」

ククククッと卑弥呼が笑い出す。邪悪な笑いであった……。

第十話　邪馬台の支配者（後書き）

卑弥呼ってば意地悪ババァですねぇ（―＿―；）　そんじゃまぁ、次に期待って事で！

第十一話　卑弥呼の憂い

さて、牢屋に入れられてしまった小次郎は、こっそり忍び足で現れた壱与を見つけ、正直なところ驚いていた。
「小次郎さん、逃げてください。卑弥呼様があなたを、句奴国の人間と思いこみ、処刑するつもりなのです」
「なんと。しかし拙者が逃げてしまえば、壱与殿、あなたにも危険が及ぶやも知れませんぞ」
青ざめた顔をしながら叫ぶ小次郎に、壱与は引き締まった表情でこう言った。
「わたしがあなたを信じたいと思ったから、そうするまで。卑弥呼様は最近おかしい、わたしに対して何かこう、嫉妬のようなものが感じられます。――できた」
壱与は木でできた錠前をあけると、小次郎を促し、地下通路を通じて外へ連れ出す。
「壱与殿。すまない」
小次郎が頭を垂れて壱与に謝る。
「いいえ。わたしは・・・・・・いけないと知りつつも、実はその・・・・・」
壱与が小次郎に歩み寄り、何かを告げようと唇を動かした刹那。
「おぅ、いたヨいたヨ！　コジロー！」
小次郎は顔をしかめ、引きつった笑みを浮かべた。
「何やってるんだ、みんな心配してたんだぜ」
武蔵は壱与を確認すると、小次郎と以心伝心して、悟っていた。
しかしマリアはと言うと・・・・・・。
「コジロー、隅に置けないデス！　カワイコちゃんつかまえたネ」
「妙なことを抜かせ！　そ、そういうのではない」
「アハハ、照れるな、照れるな、このヤロー」

「それで、どうするつもりなんだ？」
とは武蔵。
「彼女は卑弥呼から邪険にされているのだそうです。ならば卑弥呼を説得するのも手ではなかろうかと」
「どうするのだ・・・・・・」
地下牢から出てきたばかりで、まだ卑弥呼の宮殿からあまり離れてはいない場所である。
小次郎は少しばかりそわそわしてきて、
「場所を変えないか、武蔵。もちろん壱与も一緒に・・・・・・」
今、壱与を宮殿に返すわけには行かないと言う、小次郎の配慮だった。
何をされるかわかったものじゃない。
「イヨも一緒に行くデスよ！」
小次郎より早く壱与の腕を取った人物があった。マリアである！
「い、いくってどこに？」
「ナキのおうち！　さあ、行くデスよ！」
マリアは強引と言うか、何というか・・・・・・。
壱与の意志もきかずして無理矢理引きずっていく。
「お、恐ろしい女だ・・・・・・」
武蔵と小次郎は顔を見合わせて、マリアと壱与のあとをついていった。

「あの娘・・・・・・」

卑弥呼の神殿は、木造住宅で檜や杉の匂いが立ちこめていた。
薄暗いその拝殿の奥で、かがり火を焚き、部屋の中央あたりに祈る卑弥呼の姿があり、彼女は老いし我が身を呪い、震える手で皇帝から授かった銅の鏡を覗き込んだ・・・・・・。
すると、白髪、しわだらけの醜さを強調したような、老女の顔！
卑弥呼は怒りがこみ上げて、とうとう鏡を投げつけて割ってしま

う。

「壱与の若さがにくい」

卑弥呼はかつての自分を思いだし、美しさを渇望した。

美貌の女神とまで歌われた、卑弥呼の女王としての役割は、もはや風前の灯火であった。

「いやじゃ、いやじゃ、このまま朽ちて死んで行くなど、ありえん！」

だが神に祈ったところで、所詮は捨てゴマである。

「小次郎の処刑もなくなり、わらわはいったい、何を生き甲斐にせよと！」

第十一話　卑弥呼の憂い（後書き）

ピンチヒッター水乃です！
さて、らくだ先生にお詫びを＾＾；
小次郎の拷問シーンは省いちゃって申し訳ないw
なんだか苦手なので・・。

第十二話　闇夜に浮かぶ灯火（前書き）

リレー第一弾、名木です。
進展遅いですが……しばらくお付き合いください。

第十二話　闇夜に浮かぶ灯火

いよいよもって騒がしくなってきたな、と竪穴式の壁に身を潜ませた小次郎は夜の闇にぼんやり輝く灯火に目をやって、舌打ちしながら呟いた。

おそらく、自分が牢を脱したことを卑弥呼はすでに察しているはずだ。

その手助けをしたのが壱与であることも、宮殿内に彼女の姿がないことから想像するのは容易いように思う。

――さて、どうしたものか。

と顎に手をやりつつ、やはり先ほどから彼の思考を妨げ続けている騒音を封じることを優先しよう、と首を後ろに向けた。

「――マリア」

「Ｙｅｓ？」

「武蔵の鼻に、何か詰め物を」

「Ｏｈ，ｌｅａｖｅ　ｔｈｅ　ｍａｔｔｅｒ　ｔｏ　ｍｅ．　任せて下サーイ」

軽快にそう言い放ちつつマリアは、命の危険が眼前に迫りつつあるこの状況にていびきを振りまきながら豪快眠る大男のエージェントに近づき、足元のきめ細かい砂をひと掴みすると、それを相手の鼻の穴に押し込みはじめた。徐々にガマガエルのようないびきが小さくなっていく。

それでは死んでしまうのではないか、と目を瞑り量の手のひらを

合わせたが、気にせず現状の打開策を練ることに集中した。

敵の数はおよそ千より千五百の間。

間違えても二千を越えることはあるまい。小次郎と武蔵の二人ならばたやすく突破し、近くの山林に身を潜ませることも可能だろう。

――しかし。

小次郎は片隅で小さくうずくまった壱与に目をやった。見るものすべてを悲しみ包み込みそうな表情で首をうつむけている。

それに、多少の豪快さは備えているものの、一応女であるマリアもいる。この二人を率いて逃げ切ることは、不可能とまでいかなくとも難しい。かといって、これ以上この場にとどまれば那癸の家族に迷惑をかけることになり、かえって状況が悪化しかねない。

「ぶはぁっ。何しやがんだ、この女ぁ！！」

その大声に振り向くと、窒息状態からようやく目を覚ました武蔵が、鼻からぽろぽろと土砂崩れのように固まった砂を垂らしながらマリアに怒号を飛ばしていた。

ノー、あんまり怒りっぽいの良くないデース、とマリアはけらけら笑っているが、対する武蔵は怒りと呼吸困難から顔を真っ赤にしている。

それだけ大きな声を出しては、見つかってしまうのではないか、と小次郎は案じたが、ふと小さな話し声に気づき、耳を澄ました。どうやら、外から聞こえるようだ。次第に声量が大きくなってきて

いることから、こちらに向かっているものと伺える。

「しかし壱与様もご乱心だねぇ。まさか狗奴の人間を牢から連れ出すなんて」

「ということは、あの話は本当なのかね？　壱与様が卑弥呼様の跡を狙っている、とかいうやつ。狗奴とつるむってことは、つまりそういうことだろ？」

「案外、ありえるかもな。まぁ、俺も前々から怪しいとは思っていたけどね」

話の内容からして、宮殿の衛兵か何かなのだろう。

その相手を中傷しかねない内容に、思わず壱与を振り返るが、彼女は相変わらず膝を折りたたみ、顔をその間にうずめていた。話が聞こえていた様子はない。

小次郎は再び壁に顔をくっつけた。

「ところで、その狗奴の連中ってどんな人相してるか知ってるか？」

狗奴の連中とは我々のことなんだろうな、と苦笑い。

「俺は変な武器を腰から下げた二人組み、って聞いたけど」

「いや、牢の番兵の話ではもう一人、女がいるって話だ」

「ほう、女か。いいねぇ、美人だったら条件次第で俺、逃がしちゃうかも」

「残念ながら、なんとも妙ちくりんな言語を使う、背丈が小山ほどもありそうな大女らしい」

「……」

――小山ほどの大女……物の怪か？

小次郎は一瞬首を傾げたが、すぐにそれが大げさな比喩であることに気づいた。確かにマリアは小次郎や武蔵の知るところの女人（おなご）とは違い、背が異常に高い。むしろ、男として大柄な類に入るはずの小次郎よりも一寸ばかり大きいように感じる。だが彼女の生まれを知る二人は「えげれすの人間は皆こうか」と頷きあっていたので気にするまでもなかったが訳だが、初めて見る者にとっては、やはり脅威でしかありえないのだろう。

「……怪物か」

「だな。見かけたら逃がすどころか、俺たちが逃げちまうことだろうよ」

「あっはっは、違いない」

「Ｗｈａｔ！？」

楽しそうな高笑いに対抗するかのごとく、突如甲高い叫び声があがった。何事、と反応した小次郎の鼻先を、切り裂くような疾風が駆け抜ける。長い黒髪が外套のように揺らめくのを見て、ようやくその風の正体に気づき、捕まえようと手を伸ばすが、わずかなところで白い手首はすり抜け、闇の中を一直線に駆けていってしまう。

――まずい。

小次郎がそう思った刹那。

「Ｓｈｕｔ　ｔｈｅ　ｆｕｃｋ　ｕｐ！！（黙れ、この糞野郎）」

耳元を劈く様な怒声が周囲に広がった。舌打ちした小次郎は意識を高め、周りに集中するが、どうやらその大声はかなり遠くのほうまで届いてしまったらしく、思いがけぬ数の気配がこちらに向かいつつあった。

「なななななな、なんだこの女は……」
「Ｓｏｎ　ｏｆ　ａ　ｂｉｔｃｈ！！　ダレが怪物ネ！？」

そんなことはお構いなしに怒り狂うマリア。相手はひょっとするとこれが狗奴の怪物か、と火に油を注ぐようなことを呟きながらも、彼女の剣幕に押されてたじたじになっている。

だが、物腰からしておよそ素人ではない奴らが冷静さを取り戻すのにそう時間はかかるまい、といつの間にか小次郎の隣に座り込んでいた武蔵が呟いた。眠そうに欠伸をしているが、眼光はすでに鋭い。

「そうですね。……武蔵」
「あん？」
「私は壱与殿とマリアを連れてあの小山まで駆けます」
と、闇の向こうを指差し、
「あなたはしんがり（※しんがり＝最後尾）で追っ手をやりくりしてほしい」
「……逃げる、のか」
「武蔵、これは……」
「構わん、わかっている。それに、これだけの大人数を相手にするのは関ヶ原以来だ。どんな形の戦だろうと、血がうずいてたまらん」
「戦は戦でも、勝ってはいけない戦です。彼らを滅ぼすのは、本物の狗奴の連中なのですから」
「勝ってはいけない戦、か。こりゃまた難しいな」
「ふふ、配役を変更しましょうか？」
「……いや、腰の大小にかけて、しんがりを守り通してみせる」

いじわるそうに言う小次郎に眉をひそめながらも、口元に自然な笑みを浮かべる武蔵。再び自分の肉体で戦ができることが嬉しくて

たまらない、といった様子だ。

「……では、そろそろ」

「うむ。あの怪物は任せろ」

どうやら先ほどのやり取りを聞いていたらしい武蔵は、頷くと一足飛びに闇へと身を投げ出した。脇差の鯉口を切り、目標を定めると、えいや、と掛け声を発しながらそれを薙いだ。勢いのついたそれの峰の部分が興奮状態のマリアのわき腹に食い込み、ぐうっと声をあげて彼女が倒れる様を作り上げた。

地に伏したマリアを一瞥してから、ゆっくりと視線を前に戻すと、躊躇せずに腰にぶら下がったままの太刀を抜き払い、顔を青くしている衛兵の眼前に片手で突き立てる。脇差を握った左手は、真っ直ぐ上に振りかぶり、天を仰いでいる。

二つにして一つ、ゆえに天下無双。武蔵が自らの手で編み出した流儀、二点一流独特の構えである。極め付けに不気味な笑みを頬に浮かべると、相手の怯えは顕著なものとなった。

――おそらく相手はあなたの足元にも及ばないでしょうが、くれぐれもお気をつけて。

武蔵の身を案じ、手のひらを合わせると、小次郎は立ち上がり、さあ、行きましょうと部屋の隅で怯える壱与の手を取って、騒がしくなりつつある夜の闇へと駆け出した。

身をかがめ、地に突っ伏したままのマリアの体を拾い上げると、それを肩にかつぎながら、最後にもう一度、気をつけてと呟いた。

あなたはいずれ、私が倒すのですから、と。

第十二話　闇夜に浮かぶ灯火（後書き）

遅いな……確かに。指摘されるまで気づかなかった自分が恥ずかしい。

えっと、次回予告ですが、この後武蔵は最後尾で衛兵どもと斬りあいを開始して、その無骨っぷりをアピールします。

小次郎は目的どおり小山にたどり着き、そこでこちらに向かってくる匈奴の大群が邪馬台に向かっているのを発見します。

こんな感じで。では、次の人よろしく～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0128a/

time runner-MARIA

2010年10月10日05時37分発行